Jimbo, Kaku
Onseigaku Kokugo onsei
gaku

神保 格

音声学

国語音声学

國語科學講座

—Ⅱ—

音聲學

國語音聲學

神保格

株式會社

明治書院

國語科學講座

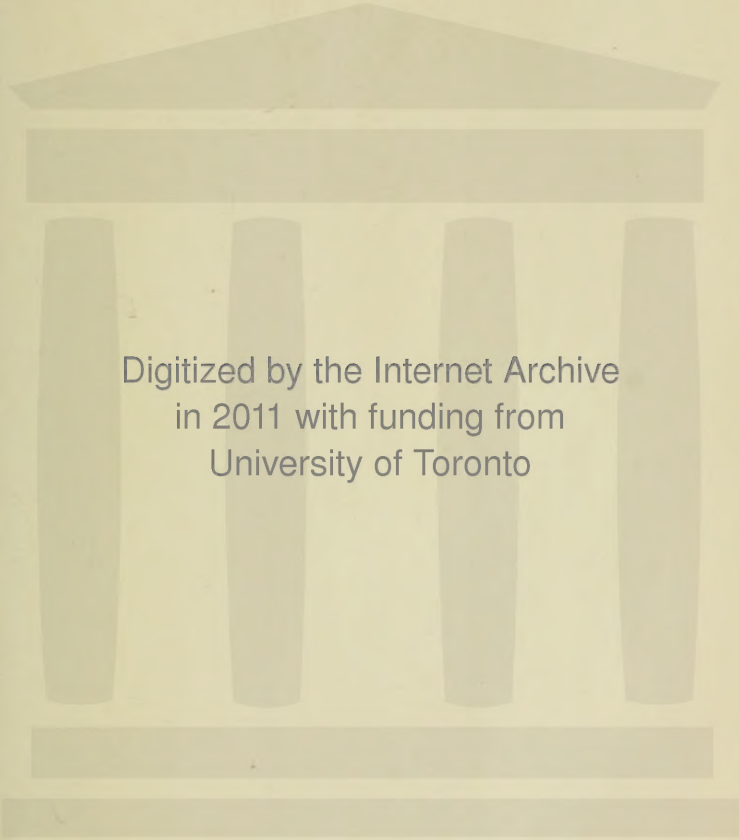
— II —

音聲學

國語音聲學

神保格

株式會社
明治書院

目次

國語音聲學

神保格

第一章　序說

私はこの稿で、日本語、主として現代東京語の發音について出來るだけ平易に述べて見るつもりである。

まづ發音といふ名前から始めよう。今こゝでは發音といふのも音聲といふのも全く同じ意味に使ふことにする。だからどちらを使つてもよいわけであるが、正確に文字を吟味すると、發音とは音を發すること、若しくは發せられたる音といふわけであらう。とにかく發の字が附いてゐる。所が聲といふものは人の口から發するものであること勿論であるが、之を耳に聽かなければ聲のあることがわからない。それだから發音といふ名前を嚴格に使へば一方で聽音といふ名前も使はなければならないことになる。それ故發するとも聽くとも特に云はない音聲といふ名前の方が一般的で無難である。唯、發の字に餘りこだはらないで發音といふ名前を音聲と同じ意味に使ふならばそれでもよいのである。

次に音聲を研究する時の大體の心得を述べて置かう。第一は文字と音聲とをよく區別して考へる事が大切である。

我が國では從來文字の教育を餘りに重んじ過ぎ、言葉の發音の教育が之に伴はなかつたといふ缺點がある。かういふ教育を受けて來た人は發音といふものに全く無關心であつたり、或は多少發音の事を考へるにしても、とかく文字に囚はれて文字を基にして考へたがる癖がある。文字に囚はれるとか文字に欺かれるとかいふのはどういふ事をいふのか、それは後で度々實例に出逢ふ筈である。今は暫く詳しく言はずに置かう。文字にも色々あるが、漢字の樣なのは却つて發音との混同を生ずる恐れが少いといつてよい。人は漢字のことを表意文字であると稱し、一字が或意味を表すといふ。それ故漢字を取扱ふにどうしても意味を主として考へ、音とか訓とかを考へても唯附帶的のものの樣に思ふのが常である。中には漢字は表意文字だから表音文字でない、從つて音を表さないのだ等と考へる人もある。表意文字だといふ所までは正しいが、だから表音文字でないと思ふのは間違ひである。漢字は意味を表してゐると共に發音をも表してゐるのである。但し前述の樣に、人は意味の方を主として考へるため發音の方が多少お留守になる。お留守になれば、それだけ文字に誤られて發音との混同を生ずる恐は少いといふわけであるから、まづその點だけは安心であるが、いけないのは假名である。假名は所謂表音文字で、アといふ假名は別に意味に關係が無く、たゞアといふ發音を表すといふ。もつと良くないのはローマ字である。カは ka といふ音であるなどゝ書いて、それ切り深く考へずにすませてしまふ。今開き直つて言つて見れば文字は假名でもローマ字でも、文字である以上紙の上に顯れてゐる形であつて眼に視るものである。之に反し發音は耳に聽くものである。紙の上に書いた文字の傍にいくら耳を近づけて見ても何の音も聞えはしない。斯う言つて見れば餘りにわかり切つた事の樣であるが、それでも屢々人は誤るのである。音聲の研究にはそれ故文字から離れ耳に聞える音そのものを取扱ふ樣十分注意しなければならない。

次に大切なことは耳をよく馴らすことである。文字の束縛から脱し、文字に囚はれたり誤られたりしない様になれば、最も大事なのは耳の感覺である。自分は耳の訓練が出來てゐないから發音の研究はだめだ等と悲觀的な事を言ふ人が折々あるが、さう悲觀したものでもない。少し心掛けて氣を附ければ耳の感覺を鋭くし音を聽き分ける力を養ふことは大してむづかしいことでは無い。勿論音樂の天才などの樣に或程度を越えた異常な耳の力は天與であらうが、言葉の發音を研究するに、而も大體實用上間に合ふ位には誰でも出來ることである。

耳を馴らすのと相伴つて之と同じ位大切なのは、發音器官の感覺を鋭くすることである。發音器官の感覺といふのは、口や喉や、又口の中の舌の動き等をよく考へることである。上下の唇を固く附けて口を結んだ時の感じと、欠伸をする時の樣に口を開いた時の感じとはたしかにちがふ。歯を喰ひしばつた時と、口をあんぐりあいた時とも感じがちがふ。歯の間に物でも挿まつてゐる時、舌の先でさぐつて見ると何も挿まつてゐない時とちがふ感じがする。之は舌の先の感覺である。又咳拂ひをしかけた時の喉の奥の緊張の感じもすぐ分かる。こんなのが即ち發音器官の感じである。すべて言葉の發音をする時は一つ一つの音を出す毎に舌や顎や唇や喉や色々の部分が樣々に動くものである。大概の人はちやんと言葉を使ひ口を動かしてゐるが、その感じに殆ど注意しない。之を屢々人は無意識に口を動かしてゐると稱する。しかしこれは眞の意味の絶對無意識ではない。たゞ日常注意しないからはつきり意識しないだけで、少し注意して見れば口を動かしつゝ、今自分の舌はどうなつてゐるか、顎がどの位開いてゐるか等といふことを意識することが出來る。この時この意識を大いに助けるものは自分の口の動きを鏡にうつして見ることである。發音を研究する人は常に鏡を用意して置くとよい。鏡で自分の口の中や喉の奥を見るには、日光を背にして日光と反對の方に

向つて鏡を口の前に取り、日光を鏡に反射させて、反射光線で口の中を照らし、之をうつして見るのが最も良い方法である。かうやつて色々と口を動かして見ると眼に助けられて發音器官の感覺が鋭く養はれるものである。

かくて耳と口との感覺に注意する樣になつたら、今度は色々な言葉の發音をして見て、口がどう動くとどんな音が出るか兩方の關係を調べて見ることが必要である。これには通常の言葉ばかりでなく、出たらめに口を動かして色々奇妙な聲を出して見るのも一つの補助的方法である。口をむやみにゆがめて見たり奇妙な聲を出して見たりすることは餘り見つともないと思ふ人があるなら、さういふ人は誰も居ない處で一人でやつて見ればよい。

第二章　發音器官の大體

言葉の音聲は音を出す方と聽く方と二つに分けて見ることが出來る。聽く働きを司るのは言ふ迄もなく耳である。勿論詳しくいへば神經も腦髓もその他も入用であるが、外から響いて來る音を先づ受取るのは耳である。之をもし名づければ聽音器官であるといつてよい。之に對し、音を出す方の器官が發音器官である。耳といふ器官は主として音を聽くための專門の器官である。(詳しくいふと內耳の中の半規管といふ部分は身體の平均を保つ働きをなす等といふことがあるが、今暫く省いておく。)所が音を出す方の器官といふのは特に專門の部分は殆ど無い。強ひていへば聲帶といふものが音を出すためのものであらうが、言葉の音聲を作るのは聲帶だけではない。唇も齒も顎も舌も鼻も喉も氣管も肺も入用である。これらの部分は皆他の目的をも兼ねてゐる。卽ち鼻は香をかぐ道具であり、唇や齒は食物を口の中に支へたり嚙み碎いたりする道具であり、舌は主に味を感ずるもの、喉や氣管や肺は呼吸をするものである。同

と道具を色々な用に使ふのと經濟的であつて、人間の身體がうまく出來てゐる一つの例である。さうして音聲を出すには肺から出入する呼吸を利用するのであるが、その中大概は吐く方の息を使ふ。試みに「今日は」等といふ短い文句を息を吸ひ込みながら言つて見ると、如何に骨が折れるかがわかる。吐く息の方が遙かに樂なのである。この樣な方の息を使ふといふ事も一つの經濟なのである。

發音に使ふ色々な器官を、次に簡單に云つて見る。

1 唇　これは說明する迄もないが、發音の際上下の唇を全く閉ぢてしまつて息の通らない樣にすることがあり、口の開閉に從つて自然に兩唇を開いたり、狹くあけたり廣くあけたりする。又唇の兩角を左右に引いて一の字形、ときには「へ」の字形に横長くあけたり、兩角を中央に向つて引き寄せるため唇の開口が圓形に近い形となり、俗にいふ「おちよぼ口」「ヒョッツトコロ」などの形にしたりする。

2 齒　さう詳しい說明はいらないが、發音上注意すべきは主に上前の方である。上下の齒も下顎の上り下りと共に喰ひしばつたり、口をあいて離したりする。

3 顎　上顎と下顎との中、上顎は首や顔と共に固定靜止して居り、下顎だけ上げ下げして口を開閉すること[illegible]である。下顎と共に下唇も下齒も上下するわけである。上顎の方で發音の說明に必要なのは口の中の天井に相當する表面であつて、此の部分が天井の形をなして凹んでゐることは誰でもよく承知の通りである。上顎の中、齒に近い半分は内部に骨が無くて指の先で押して見るとぶく／＼と柔かい。從つて食物を呑む時や息をする時や發音する時に[illegible]し奧へ引込む樣に動いたり前へ出る樣に下がつて來たりする。この事は自分で鏡を見るとよく分かる。この奧の半分、

柔かい部分を「軟口蓋」と名づける。口元に近い前の半分は內部に骨があつて觸ると堅いので「硬口蓋」と名づける。口蓋とは上顎の表面、口の天井の別名である。硬口蓋のへりは卽ち上齒の生えてゐる所である。その上齒のはぐき(齦)は蒲鉾形に隆起して居る。殊に前齒のすぐ後のはぐきはこの隆起が著しい。齒ぐきは大きくいふと硬口蓋の一部分と見てよい。之と同樣に軟口蓋の一部分に小さい肉片が上から垂れ下つて居る所がある。口を大きくあけて中をのぞくと軟口蓋の緣はアーチ(圓形門)の形になつて居るその上端中央に垂れ下つて居る小肉片、之を俗に「のどひこ」「こじた(小舌)」などといふ。又懸壅垂といふむづかしい名もある。こんなものも國によつては言葉の發音に使ふことがある。(日本語では使はない。)

4　舌　これも說明はいらない。たゞ舌といふものは柔かくて良く動くもの、その形も實に樣々に變るものといふことをよく注意するとよい。發音の說明に必要なのは舌の表面であるが、その表面は大體饅頭形に圓くなつてゐる。動かし方によつては平にもなり、眞中に溝を作ることも出來、又は舌の奧の方だけ持ち上げて見たり先端の方だけ持ち上げて見たりすることも出來る。しかし大體は口蓋(上顎の丸天井の表面)と平行に向ひ合つてゐるわけである。そこで發音の說明に必要上、舌の表面を色々に區分し、奧の半分卽ち軟口蓋に向ひ合つてゐる部分を後舌面(奧舌)と名づけ、前の半分卽ち硬口蓋に向ひ合つてゐる部分を前舌面(前舌)と名づける。前舌面の中で、舌のへりは丁度上齒、及び上齒齦に相對するわけになる。この前舌面殊に舌の緣は一番運動の自由な部分であつて、之と向ひ合ふ硬口蓋の前部、上齒齦や上齒の裏あたりとの間に樣々な音聲が作られる。各國語の發音を調べて見るとこの邊で作り出す音聲の種類が比較的多いことを發見するのはかういふわけである。

5　口腔　上述の如く唇、齒、口蓋、舌、及び頰の內面で取圍まれた所が卽ち口の中の室である。之を口腔（又はコークーと讀む人もある）と名づける。

6　鼻　之も詳しくいふには及ばない。顏面の外から見える二つの孔は卽ち鼻の孔でその奥へ入ると鼻腔といふ廣い室になる。これは鼻中隔と名づける壁が眞中にあつて鼻腔は左右二つの室に分かれるが、ずつと奥の方へ行くとこの壁は盡きて道は一つになる。さうして口腔の奥、軟口蓋のうしろの方へ道が續いてゐる。

7　咽頭　これは口腔の奥を堺する軟口蓋のもう一つ奥の室である。口を大きくあけてその中をのぞいて見ると、軟口蓋のアーチ形小門のもつと奥が見える。鼻腔の奥はこの咽頭の室に續いてゐるのである。咽頭を更に奥の下の方に下ると食道と氣管とへ續くことになる。食道は後の方、氣管は前の方で二本相平行して接續してゐるが、咽頭へ出て來ると一つの室になるわけである。それだから咽頭は町の四つ角（十字路）の様な所で、咽頭は一つの室で丁度十字路の中央の廣場に當り、上へ行けば道は二つに分れて一つは鼻腔へ通じ一つは口腔へ通ずる。下へ行けば又道は二つに分れて一つは食道から胃へ通じ一つは氣管から肺へ通ずる。そこでこの四ツ辻の交通を整理する交通巡査の様な役目をするものが二つある。その一つは軟口蓋である。前に言つた通り軟口蓋は柔かくて動くから、時として奥へ引込んで少し上がると咽頭の後の壁に密着する。さうすると鼻腔へ通ずる道が塞がれてしまひ、肺から出て來る空氣は鼻腔へ入らずに口腔の方に流れる。もし軟口蓋が下がつて前へ出ると咽頭の後壁から離れるので、鼻腔への通路が開かれ、肺から出て來る空氣は口腔と鼻腔と兩方に流れる。もしこの時兩唇か何かを閉ぢて口腔の道を塞げば空氣は鼻の方だけに流れる。之と同樣、交通巡査的の他の一つは舌の奥に附いてゐる會厭といふものである。（會厭は內部に軟骨を含

んでゐる、その軟骨を會厭軟骨といふ。これは氣管へ入る入口を塞ぐ働をするもので、食物を呑み込む時、食物が氣管へ紛れ込まない様に入口をふさぐのである。又この會厭は聲帶(後にいふ)から出る聲に一種の響を與へる働もするのである。

8 **喉頭** 喉頭は氣管の一部分である。卽ち氣管の最上端にあつて特別な一區劃をなしてゐる小さい室の様なものである。この室から出れば直に咽頭の室に移ることになる。前に云つた會厭もこの喉頭も、口をあけて外からのぞいても見えないが、喉頭は丁度、顔の外からいつて顎の下の俗に「のど」といつてゐる所に當るのである。男の成人、殊に老人で痩せた人などは「のど」の所に出つ張りがあつて、物でも呑み込むとゴク／＼と動くものがある。これは喉頭といふ小室の一角が突き出てゐるのである。突き出てゐない人でも、のどを外から指で搜つて見ると堅いものがあるので喉頭の位置がわかるのである。か様に堅いのは喉頭が軟骨から出來てゐるからである。數箇の軟骨が集まつて骨組を作り、之に筋肉や粘膜が附いて小さい室を作つてゐる。その喉頭の中に聲帶がある。

9 **聲帶** 聲帶は喉頭の室の中で左右の壁から張り出した襴の様な形のものである。左右一對あつて、之を合せて聲帶といふ。聲帶といふ文字を見ると、帶は「おび」であるから細い紐の様な感じを連想するが、實は襴の様なものである。主に筋肉から出來てゐて軟かく、様々に動くものである。左右から張り出した襴の間に隙間があるわけであるが、聲帶が左右に遠く離れるとこの隙間は甚だ大きくなる。吾々がふだん靜に呼吸して居る時は此の様に隙間が大きく開いてゐる。もし聲帶が左右から接近して來ると、終に眞中で相接してしまふ。さうすると隙間は全く無くなり、息は通らなくなる。この時息を稍〻強く吹くと相接した聲帶が押し分けられて縁がビリ／＼と振動して音が出る。こ

の音即ち「こゑ」である。こゑといつても色々あり聲帶の張り方や息の吹き方の強い弱いによつて色々な聲となる。左右から強く接觸させて強い息で吹き破ると所謂大きい聲強い聲が出る。軍人のかける號令や物賣りが遠くの人に向つて叫ぶ聲は大きい強い聲である。瀕死の病人が出す蚊の鳴く様な聲は小さい弱い聲である。又聲帶を強く張ることもある。ゴムの布を引張つて延す様に聲帶を引張つて延しておいて振動させると調子の高い聲になる。その反對にゆるめて置いて振動させると調子の低い聲になる。これが即ち音樂に利用されるもので、ドレミファソラシドの様に音階を追ふた調子が段々に高くなるのは聲帶が次第に強く張られるからである。又人々の生れつきの身體の構造により聲帶の長短がある。女や子供の聲帶は男の成人のよりも短いので高い調子の聲、俗にいふ甲高い聲、黄色い聲が出るのである。この聲の調子の高低といふことは、日本語のアクセントの説明に大切であるから、よく注意して置くのが良い。

10 その他の部分　即ち氣管とか肺臟とかを發音器官の中に入れれば入れられるが、特に説明する迄も無いであらう。一體人間の身體は(他の動物でもさうであるが)有機體といつて各部分が一々分れてはゐるが互に密接な關係があるもので、どんな小さな一部分と雖も身體全體に關係があるものである。發音器官といつても以上述べた部分には骨も肉もあれば、血管や運動を司配する神經もある。血管や神經を考へる以上は心臟も腦髓も胃腸も考へなければならず、これ等に營養を供給する食物消化器官も、又これ等全部を支へ且保護する骨格も皮膚も又は所謂內分泌器官も入つて來、結局身體全體が無ければ發音器官も成立たないといふことになるのであるから、便宜ある點で切つて以上列記した部分だけを考へればよいとして置くのである。

第三章　色々な音聲の略說

以上述べた色々の發音器官を色々に働かせて樣々な音聲を作り出し、この音聲を連げて言葉とするのであるが、今次に言葉、主として日本語を組立てる音聲の一つ一つにつき出來るだけ平易な說明を試みよう。但し前にも言つた通り發音は耳に聽くものであつて、文字で書いただけでは何も聞えない。今この講座の樣に紙の上に書いた文字だけで發音を說明しようといふのは元來無理な話しである。この講座に蓄音器のレコードでも附けて配附すればどうかかうか間に合ふかも知れないが、今はそれも出來ないから、讀者はこの文字の說明を讀んで了解する外、他人の聲を聽いたり自分で發音して見て研究していたゞきたいのである。

パ　ピ　プ　ペ　ポ

先づこの一行を發音して御覽なさい。之を發音する時試に之をパーといふ風に長く延ばして見ると何時の間にかアーといふ聲だけになつてしまふ。ピーも同樣で延ばすとイーになつてしまふ。即ちパピプペポは之を延すとアイウエオになつてしまふ。その他所謂五十音圖の横の段カサタナ等を同樣に延ばして見るといづれもアーになつてしまふから、パカサ等のちがひはアーの方に在るのでなく、アーの始めの所だけがちがふことを知るのである。英語を少しでも稽古した人ならばパカサ等は〔pa〕〔ka〕〔sa〕等と書くことを知つて居るであらう。即ちアは〔a〕であつて皆同じである。その始めに〔p〕〔k〕〔s〕等が附く。或はもう少し進んで英語を學んだ人は〔p〕〔k〕〔s〕等が子音(シイン)と名づけられ〔a〕〔i〕〔u〕等が母音(ボイン)と名づけ

られることを知つてゐる。今パピプペポについてその〔p〕に當る子音の部分をよく調べて見よう。それには各自發音して見て自分で研究しなければいけない。發音しながら鏡を見て自分の口がどんなに動くかを直視すれば一層良くわかるが、鏡を見ないでも自分で口を動かしながら口の感じに注意して見ても容易にわかる。それはパピプペポをいふ時唇の動くことである。どう動くかといふと、先づ上下の唇を附けて口を堅く閉ぢてしまふ。さうしてその次に稍急に口を開いてアといふ聲を出すとパになる。口を開いてイといふ聲を出すとピになる。その他ウをいへばプになり、エをいへばペになり、オをいへばポになる。その時唇を附けて口を閉ぢるといふ働きはいつも同じである。それだからパピプペポのちがひはアイウエオのちがひであつて、その始めに附く子音卽ちpは皆同じことである。之を圖で示せば左の如くになる。

p — a ＝ パ
p — i ＝ ピ
p — u ＝ プ
p — e ＝ ペ
p — o ＝ ポ

p＋a（ア）＝パ
p＋i（イ）＝ピ
p＋u（ウ）＝プ
p＋e（エ）＝ペ
p＋o（オ）＝ポ

この〔p〕を取去つてしまふと只のアイウエオになるが、アイウエオの方は唇を附けて口を閉ぢるといふ働きをしないのである。兩唇を結んではアイウエオが云へない。今アパート等いふ語の中のアパといふ所だけを發音して見るとアの次にパが來る。ローマ字で書けば apa である。このパをいふ時は兩唇を閉ぢて置いて急に開いてアに移ることは旣に述べた。今はこのパの前にもう一つア（a）がある。そのア（a）からパへ移る時口がどう動くかを注意して御覽なさい。始めのaをいふ時兩唇を開いてゐなければアが出ない、そして次のパを云はうとする時先づ唇を閉ぢてそれから之を急に開くのだから、始めのアからパへ移る時は開いてゐる唇を閉ぢるといふ働きがある。かくて閉ぢて後急に開くと次のパになる。この唇を閉ぢる迄が始めのアである。唇を閉ぢた

時はもう〔p〕の部分に入つたのである。唇を開けば〔p〕の部分が終つて次のアに移つたのである。それだから詳しくいふと〔p〕の部分には唇を閉ぢるといふ働きと開くといふ働きとが兩方含まれてゐるわけである。否もつと詳しくいふともう一つある。それは閉ぢてから開く迄の間である。この間暫く息を止めてゐるのである。今試にアパといふ時アーpと云ひかけて唇を閉ぢたまゝ開かないで居て御覽なさい。息が全く出なくなる。之を一分間近くも續けてゐると、丁度泳ぎで水の中へ首を突込んだ時の樣に呼吸を止めて我慢してゐることになり、長く續けてゐるとだん〳〵苦しくなつて遂に我慢がしきれなくなる。そこでパツと口を開けば口の中に溜つて居た空氣が解放されて呼吸が出來る樣になる。唇を閉ぢたまゝ口の中に空氣を溜めてゐる時間が長いと苦しくなるが、この溜めてゐる時間はもつと短くすることも隨意に出來るわけで、その極めて短いのが即ちアパといふ時である。アパの時は唇を閉ぢてから開く迄時間が甚だ短い。短いけれどもやはりその間は一寸呼吸が止まつて口の中に空氣が溜まるのである。故にアパといふ時〔p〕で表す音は、(1)唇を閉ぢる働、(2)閉ぢた儘で空氣を溜めてゐる働、(3)唇を開く働、この三種の働きを含んでゐる。唯それが極めて速く行はれるから通常人は氣が附かないのである。それならばアパ(a p a)の始めのアも終のアも出さないで眞中の〔p〕だけを單獨に發音したらどうなるか。先づ唇を閉ぢる。この時は何も音が出ない。自分でやつて見ると、音は聞えないが今迄開いてゐた唇を閉ぢるといふ感覺があるからわかるが、他人がやる時は、その人の口を視てゐなければ、何時の間に唇を閉ぢたのか、音が聞えないからわからないわけである。さうして一寸息を止めて之を急に開く。たゞし開いてもパといふ聲を出してはいけない。たゞ唇を急に開くだけにする。さうすると、口の中に溜つてゐた空氣が解放されて極々輕く(プッ)といふ樣に息の迸出する音が聞える。この樣に、(1)先づ唇を閉ぢる、(2)息を溜め

る、(3)唇を開く、これだけが單獨に發音した〔p〕である。この時實際音の聞えるのは(3)だけである。(1)と(2)とは全く何の音も聞えない。發音する人自身では(1)で唇を閉ぢるといふ感じ、(2)で息を止めてゐるといふ感じがはつきりわかるが、傍から聽く人が眼でもつぶつて聽いてゐればわからない。(3)の所へ來てプッとかすかに息の迸り出る音が聞えるだけである。かういふ仕方は日本語で通常行はないが、英語などではランプ〔lamp〕といふ樣な語の一番終の所で唯息だけを吹き出す〔p〕といふ發音をすることになつてゐる。日本語のプとかパとかいふ時は唇を急に開いたその瞬間からアをいひ始めるから息だけが吹き出るといふことが無い。空氣は出るわけであるが、その空氣の中にはアといふ時の「こゑ」が交つて出るのである。たゞ〔p〕だけ單獨に云ふと、こゑの交つてゐない空氣(息)だけが吹き出るのである。こゝで〔p〕をいふ時單に息(空氣)だけを使ふこと、即ちこゑの交らない空氣を使ふことは他の音の説明の時にも入用な大切な點であるからよく憶えておかなければならない。

サ □ ス セ ソ

次にはサといふ音を調べて見よう。之もサーと長く延ばすとアーになつてしまふから、サはアの始めに一種の子音が附いてゐることが解る。ローマ字で書けば〔sa〕で〔a〕がアであるから、今は〔s〕で書く音をよく考へて見ればよいのである。sの字はエスと讀むが、今調べる音はエスではない。この時も假名のサの字やローマ字のsの字に囚はれず音その者をよく注意しなければならない。それには先づサと言ひかけてその始めの所に氣を附けて見ると輕く息のスーと出る音が聞える。この時口の中でどんな働をしてゐるか、出來るなら各自鏡を見て自分の口を觀察する。さうして今

度は鏡を見乍に自分の口の動き方を口の感じだけで考へて見ることが必要である。一番主な所は舌の先の方である。その舌の先の方が上歯齦のあたりに接近してゐることがわかる（大體の場合は鏡を見ても上下の齒が嚙み合つてゐて舌の先の方はかくれて見えないであらう）。この時舌の先は上歯齦に接近するが密着することは無い。之を知るにはサとタと兩方を發音して比べて見るとよくわかる。タといふ時舌がどうなるか。やはり舌の先の方を使ふのであるが、舌の先が上歯の裏と上歯齦にぴたりと着くことがわかるであらう。タを發音する時はかうして着けた舌の先を再び離してアに移る時に出る音である。之と比べて見るとサの時は舌の先が上に着かない。もう少しで着きさうになる位接近するが着かない。それだから舌の先と上歯齦の間に極々狹い隙間が出來る。この隙間を息が通るのでそこで（スー）といふ樣な音が出來るのである。この音は丁度二枚の紙をこすり合せる時と同じ樣な音である。今は狹い隙間を通る時空氣がその隙間に摩擦を起すのである。この音を音聲學で「摩擦音」と名づけてゐる。（摩擦音はまだ他にもある。いづれ後に說明する。）この一種の摩擦音の符號として〔s〕といふ文字を使ふのである。この〔s〕といふ形の文字を口で云ふ時たゞ（スー）と息だけ出しては云ひ悪くもあり、不明瞭でもあるから假に「エ」を附けてエスといふのである。エスとは〔s〕といふ形の文字の名稱である。〔s〕エスといふ文字を以て（スー）といふ摩擦音の符號にするのである。符號（文字）の名稱と、その符號（文字）の表す音とは區別して心得てゐなければいけない。さてこの摩擦音を發した後、摩擦をやめ口を廣く開いてアといふ母音に移る。之がサといふ音である。この摩擦音の部分だけを長く引延ばして、sーと發音することも出來る。この時は舌の先と上歯齦との間の隙間を狹くしたまゝで動かさないで居ることになるから、息はいつ迄も摩擦を續けてゐる。この摩擦の音を續ける長さは任意に長くも短くも出來る。その極短くして直にアに移

る。母音を作るに必要なことが二箇條ある。一つはこゑである。卽ち聲帶の振動により生ずる音である。他の一つは口の開き工合である。口の室(口腔)を色々な形にしてそこにこゑが響くとアイウエオの母音になる。この二箇條はどちらの一つが缺けても母音にならない。聲帶の振動といふ箇條だけあつて口腔の中に響くといふ箇條がもし無かつたら、それは母音にならない。もし我々の喉頭だけくり拔いて取り出し、空中で「ふいご」か何かで風を送つて聲帶を鳴らすことが出來たとしたら、丁度玩具のゴム風船に附いてゐる笛を鳴らす樣な工合に、唯單調なピー／＼いふ音が出るだけであらう。是だけでは母音にならない。又その反對に口腔の形をアイウエオをいふつもりで色々に變へて見るだけでこゑを出さなかつたならば、唯口がワグ／＼モグ／＼動くだけで何の音も出ない。是では勿論母音にも何にもならないのである。それだから母音を發音するには上記の二箇條が是非とも入用であることがわかる。今アイウエオのちがひはどうして起るかといふ詳しい說明は暫く後廻しとし、母音を發する時こゑを使ふといふ點だけをよく注意して置いていたゞきたい。こゑを發するには聲帶の振動することが必要であるが、聲帶が振動してゐるかどうかを自分で感じ分けることが研究上大切である。聲帶が振動して聲が出れば自分の耳に聞える筈である。聲帶が振動しなければ勿論こゑは聞えない。この區別を尚一層よく聞き分けるには自分で兩耳をふさいでやつて見るとよい。兩耳をふさいだまゝこゑを出すと、耳の中にはつきりこゑの響くのがわかる。

ザ　□　ズ　ゼ　ゾ

先づザを長く延してザーと云つて見るとアーになつてしまふ。これ前のパやサ等と全く同じである。卽ちザはアと

いふ母音の前に一種の子音が附いてゐる。これもパやサと同じである。パには〔p〕といふ破裂音と名づける子音が附いて居り、サには〔s〕といふ摩擦音と名づける子音が附いて居る。ザの始めに附いて居る子音を〔z〕といふ文字で表す。〔z〕といふ子音、即ちザと言ひかけた時の音は口の中でどんな作り方をするかといふと、それは〔s〕と全く同じである。舌の先を上歯齦に接近させて狭い隙間を作る。この點で〔s〕と〔z〕とは全く同じである。それならば違ふ所は何處であるかといふと、〔z〕ザの中の子音ではこゑが交つてゐるといふことである。今比較のためもう一ぺん〔s〕サの中の子音を發音して見る。〔s〕の時の狭い隙間を空氣が通過する時摩擦の音を起すのであるが、この空氣は肺臓から出て來て氣管を通り喉頭を通り咽頭を通り口腔を通りさうしてこの狭い隙間に打つかる。喉頭を通る時、喉頭の中にある聲帶が左右に遠く離れてゐる時は聲帶の振動即ちこゑを生じない。空氣は何の音をも立てずに喉頭を通過してしまつて舌の先の狭い隙間までやつて來る。この隙間の所で空氣は摩擦を起し、こゝに始めて音が出る。この音は隙間の所で發する音であつて、此處へ來る迄は音の無い空氣(唯の息)である。然るに聲帶が振動してこゑを發すると、肺から來た空氣は聲帶の振動即ちこゑを伴ひ咽頭を通り口腔を通るのであるけれども、この空氣の中にはこゑといふ音が混じてゐる。換言していへば「こゑを伴つた息」が口腔まで出て來る。而して舌の先と上歯齦との間に〔s〕と同じ狭い隙間を作るとそこから摩擦音が出るから、此處から先は今迄出て來たこゑといふ音と、今生じた摩擦音と二つの音が一所になつて口の外へ出ることになる。これが〔z〕で表す音である。之を形容していへば、「こゑを伴つた息で隙間を作つた摩擦音」であつて、やはりさうし摩擦音の一種であるから息の流れ出てゐる間摩擦の音が永く續くことは〔s〕の時に異つたのと同じである。〔z〕を長く續けて出すと丁度蜂か何かの蟲が飛ぶ時の羽音の樣に聞える。この音を短くし

れば示となる。此の始めの子音を〔b〕といふ字で表す。即ち前頁下圖の樣になる。

この〔b〕と〔a〕と續けてba（バ）と發音する時の有樣を圖によつて示すと上圖の樣になる。

以上パとバとの比較でわかる通り、パ（pa）の中の〔p〕を無聲破裂音と名づけ、バ（ba）の中の〔b〕を有聲破裂音と名づける。

注意　パが破裂であるとか無聲音であるとか言つてはいけない。パは〔p〕と〔a〕とつながつて〔pa〕となつたものであるから、〔pa〕全體が破裂音とか無聲音とかいふのは意味をなさない。「パの中の子音」「パの始めにある〔p〕音」等といはなければならない。

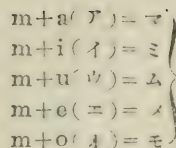
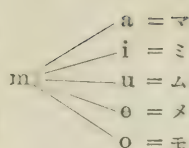
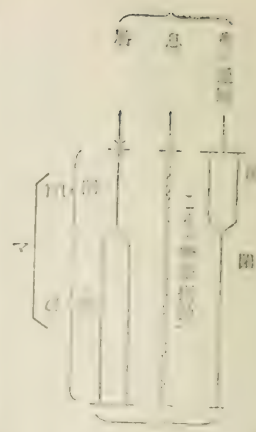
マ　ミ　ム　メ　モ

この假名で表す音を次に研究して見よう。この時も先づマミムメモと發音して見て鏡を見るか又は自分の口の感じに注意してみる。さうすると最先に氣のつく事は兩唇が附いて又離れることである。この點でパやバの時と同じである。次に大切な點は鼻から息の出ることである。鼻から息が出るといふのはどうして出來るかといふと、軟口蓋が下つて咽頭の後壁から離れるからである。（前記發音器官の中「咽頭」の部、九頁　參照。）今迄説明したハでもバでもサでもザでも、又は母音でも、一々ことわらなかつたが、之を發音する時は軟口蓋が上つて咽頭の後壁に密着して鼻腔へ通

する路をふさいで居るのである。斯様に軟口蓋が上つたり下つたりする働は鏡を見てもなかなかわかり憎い。口を唯大きくあけて口からハーと息を吸ひ込んで見ると軟口蓋の動く有様はわかるが、パとかマとかいふ音を發音しながらでは鏡を見てもよく見えない。又自分の口の感じに注意して見てもどうもはつきりした感じが無いであらう。けれども、パとかマとかいふ音を出さうとすれば自分の氣の附かない中に軟口蓋はちやんと上つて咽頭の後壁に着いてしまふのである。パやマを發音しようと思ふだけで軟口蓋は恰も忠實にして熟練な從僕の如く、我が命令を待つ迄もなく自ら心得て後壁に附いてくれるのである。その反對にマミムメモを言はうとすれば、軟口蓋は自動的に咽頭の後壁から離れてくれる。この事は鼻の孔を塞いで發音して見るとよくわかる。パ、バ、サ、ザ及び其音を發するに、鼻の孔を塞いでも差支なくても音に少しも變りはない。これ、息は全く鼻の方へは行かないからである。然るにマミムメモを發音する時鼻の孔を塞ぐと、丁度バビブベボに似た鼻のつまつた妙な音になつてしまふ。これ息は咽頭から軟口蓋の後ろを通つて鼻腔に入るが鼻の孔から外へ出ようとする處を止められるからである。鼻の孔を塞がなければ息は鼻腔から外へ出るのであたりまへのマミムメモとなる。それでマミムメモには鼻から息が出るといふ大切な要素のあることを知るのである。こんどはマミムメモと言はずに、マと言ひかけて兩唇を閉ぢた儘で開かないでゐるとどうなるか。丁度（ムー）といふ様に鼻から息が續いて出る。兩唇は閉ぢた儘だから口から息が出ることが出來ない。息は一部分は口腔の中にこもつて居るが一部分は軟口蓋の後ろを廻つて鼻腔へ入り鼻の孔から外へ出る。もしこの時鼻の孔までも塞いでしまへば息は鼻からも出ることが出來なくなり、之を長く續ければ息が止つて苦しくなる。さて茲でもう一つ注意すべきは、この時聲帯が振動してこゑを出してゐるといふ事である。即ち今息が出るとか止まるとかいつ

たが、その息は前にも述べた「こゑを伴ふ息」「有聲の息」である。兩唇を閉ぢたまゝで（ムー）といふ樣なこゑを出すのである。この有聲の息は兩唇を閉ぢた儘の時、口からは出ることが出來ないで鼻から出る。かういふ一種の音を〔m〕といふ符號で表す。この〔m〕にこゑを伴ふものだから、その聲を使つて歌のふしを歌つて見ることも出來る。例へば君が代か何かの唱歌のふしだけを〔m〕を長く引いて歌ふことが出來る。俗に「鼻唄をうたふ」といふのは斯ういふやり方をする事である。この〔m〕を極く短く言つて直に唇を開いてアに移ればマになる。その他同樣にしてイに移ればミとなり、ウに移ればムとなり、エに移ればメとなり、オに移ればモとなる。例の通り圖で示すと、上の樣になる。

m ─ a ＝ マ
m ─ i ＝ ミ
m ─ u ＝ ム
m ─ e ＝ メ
m ─ o ＝ モ

m＋a（ア）＝マ
m＋i（イ）＝ミ
m＋u（ウ）＝ム
m＋e（エ）＝メ
m＋o（オ）＝モ

今度は〔m〕とア（a）と續けてマと發音する時の働を考へて見ると、アといふ母音はこゑが口腔の中に響いて口から外に出ること、既に述べた。而してこの時軟口蓋は上つて咽頭の後壁に附くので息は鼻腔へ入らない。之も既に述べた。然るにその前にある〔m〕は息が鼻に拔ける。故に〔m〕からアへ移る所で、今迄下つて居た軟口蓋が上つて咽頭の後壁に附くといふ働をする。而して一方唇の方はどうであるかといふに、〔m〕を言つてゐる間は（如何に短くとも）兩唇を閉ぢてゐる。それがアに移る所で兩唇を開くことになる。それ故、軟口蓋を上げて咽頭の後壁に附けると交代に唇の方を開くのである。こんな働を一々自分で氣を附けて、さあ是から軟口蓋を動かさうなどゝわざと力を入れて見ると却つてうまく出來ない。マと言はうとすれば唇と軟口蓋との交代運動が自動的にうまく行はれるのである。さうして今度はこゑの方はどうであるかと考へて見ると、〔m〕は既に述べた通り有聲音である。アも母音であるから勿論こゑを使ふ。故にマ（ma）といふ全體に始めから終り迄こゑの使ひ通しである。これ等

關係を圖に譬へて見ると上の如くになる。

〔m〕といふのは子音の一種である。しかし破裂音ではない。〔p〕〔b〕と同樣に兩唇を閉ざるけれども、鼻の方へ息は常に通じてゐるから息が止まるといふ事がない。從つて唇を開いても中に溜つて居た息が急に破裂して出て破裂の音を出すなどいふ事が起らない。それならば〔f〕や〔v〕の樣な摩擦音であるかといふとさうでもない。m——と長く續けて言つても別に摩擦の音は聞えない。前に破裂音は瞬間的の音であり摩擦音は繼續的の音であるといつた。此の術語を用ひれば、〔m〕は摩擦音ではない繼續的の音であるといふことが出來る。

p b m の比較

この三つの子音の一々については今迄詳しく述べて來たから、今はこの三つを並べて似寄つた點と違ふ點とを調べて見よう。先づ第一にこの三つに共通な事は兩唇を閉ぢるといふ點である。次に〔p〕と〔b〕とは共に破裂音である。〔m〕は鼻音である。次に〔p〕は無聲音であり、〔b〕と〔m〕とは有聲音である。之を纏めて表の形にすると左の如くになる。

パの中の子音	p	兩唇音	破裂音	無聲音
バの中の子音	b			有聲音
マの中の子音	m		鼻音	

それ故、一々名前を附ければ次の如く言へよう。

〔p〕は…無聲兩唇破裂音　〔b〕は…有聲兩唇破裂音

〔m〕は…有聲兩唇鼻音

注意　（一）兩唇、（二）舌尖、（三）奥舌等、この三ケ條の並べ方にどれを先にしてもよい筈である。又、破裂音といふ以上に破裂する前に必ず閉鎖があるにきまつてゐるからわざ〱兩唇閉鎖破裂なとゝいふに及ぶまい。

この樣にこの三種の音は色々の點で共通な性質を持つて居り、相互に非常に密接な關係をもつてゐる。故に之にアイウエオの母音の附いた、所謂パ行バ行マ行は言葉の中で相通じて用ひられる例がある。例へば「蒲」はカバともガマともいひ、「淋し」はサビシともサミシともいひ、「煙」はケブリともケムリともいふ。又「一杯」はイッパイであり「三杯」はサンバイであり、「人夫」はニンプともニンブともいふ樣なものである。

タ□□テト。　ダ□□デド。　ナニヌネノ。

今迄述べて來たことをよく了解した人は、今これから述べる事につき前と同じ樣な詳しい說明をしないでも直にわかるであらうと思ふ。玆に擧げる所謂タ行ダ行ナ行の關係が、丁度前のパ行バ行マ行の關係と同じである。これを冏明かに知らうと思ふなら、タとダとナとを發音して見て口の中でどんな働が行はれるかを調べて見るとよい。始めに例へばタを發音して見ると、今度は前のパやバ等の時とちがひ、兩唇を閉ぢるといふ働の無いことに直ぐ氣が附く。その代り舌の先を上齒の裏と上齒齦のあたりに附けることを知る。さうして破裂音を作るのである。即ち舌の先と上齒裏上齒齦とを密着して息を止める。密着した儘で暫く續けると口腔の中に空氣がこもつて次第に苦しくなる。（この時軟口蓋は上つて咽頭の後壁に附着し、鼻へ行く路を塞いでゐること勿論である。）さうしておいて舌を急に離すと、こもつて居た空氣が解放されて勢よく迸出しこゝにやはり一種の

「破裂」の音が出る。この舌の先で息を止めて居る間を極短くして舌を離すと共にアを出せばタとなりエを出せばテとなりオを出せばトとなる。(チとツとはちがふ音であるから今此處には入れない。いづれ後に別に說く。) 次にダとナとを發音して見ると、やはり舌の先

タの中の子音	t	舌先齒裏閉鎖	破裂音	無聲音
ダの中の子音	d			有聲音
ナの中の子音	n		鼻音	

が上齒裏と上齒莖とに附くことタの場合と全く同じである。而してダの時はやはり一種の破裂音であつて、タとのちがひはこゑの有無に在る。タでは舌を附けてゐる間こゑは出さないで舌を離してアに移る所から聲を出す。ダでは舌を附けてゐる間から既にこゑを出してゐて、アへ移つてもこゑは續く。ナの始めにある子音は鼻音である。即ち舌の先で息を止めて口から息を出さない樣にしてしまひ、その代りに軟口蓋を下げて鼻への路を開き、こゑを帶びた息を鼻から外へ出す(有聲鼻音)。そこでこの三種の子音を表すため、タの中の子音(無聲、舌先齒裏、破裂音、今名前を簡單にするため齒裏を省いておく)に〔t〕を使ひ、ダの中の子音(有聲、舌先齒裏、破裂音)に〔d〕を使ひ、ナの中の子音(有聲、舌先齒裏、鼻音)に〔n〕を使ふ。これは普通のローマ字でも又英語でもドイツ語フランス語などでも、この字を使ふから一々改めて學ぶ必要はあるまい。之を圖示すれば左表の如くになる。

n { a =ナ, i =ニ, u =ヌ, e =ネ, o =ノ }

この中で〔n〕の後にアを云へばナになり、イを云へばニとなる等、これを例の如く記すと下圖の様になる。

n+a(ア)=ナ
n+i(イ)=ニ
n+u(ウ)=ヌ
n+e(エ)=ネ
n+o(オ)=ノ

〔t〕の後にアを云へばタになるが、それならイやウを云つたらどうなるか。〔t〕の後に直ぐイをいふ

t ＜ a ＝タ / i ＝ティ / u ＝トゥ / e ＝テ / o ＝ト

t＋a（ア）＝タ
t＋i（イ）＝ティ
t＋u（ウ）＝トゥ
t＋e（エ）＝テ
t＋o（オ）＝ト

d ＜ a ＝ダ / i ＝ディ / u ＝ドゥ / e ＝デ / o ＝ド

d＋a（ア）＝ダ
d＋i（イ）＝ディ
d＋u（ウ）＝ドゥ
d＋e（エ）＝デ
d＋o（オ）＝ド

とティとなる。ローマ字で書けば〔ti〕である。ウをいふとトゥとなる。ローマ字で書けば〔tu〕である。これは近年外國語から入つた語の中例へば水蒸氣をスチーム（steam）といひ、[illegible]といふ。又午後のお茶の會をティーパーティ（tea party）といふ。こんな時に使はれる。又英語で一、二、三をワン、トゥー、スリーといふ。競走の時出發の合圖などに屢々使はれる。これらは極めてやさしい音である。今迄かういふ外來語を使ひ馴れなかつた人には始め一寸出し憎いかも知れないが、小學校の兒童などにやらせて見ると何の苦もなく出來る。この〔ti〕や〔tu〕を表すべき假名が無い。一字で書き得る假名が無い。こゝが又例の通り文字と發音と混同してはならぬと始めにことわつたその一例である。假名文字は有つても無くてもかまはない。發音其の者がわかり、それを發音し得ればよいのである。強ひて書けば上の如くティ、トゥなどとすればよい。〔d〕についても同様で之を纏めると、上圖の様になる。

カキクケコ。ガギグゲゴ。ガギグゲゴ。

これらの假名で表される音は、前に述べたパパママババなどの中の音と丁度同じ様な關係である。今度はいきなり圖で説明して見よう。

次の圖は前に出したのと大體同じであるから、前に述べた説明をよく了解した人ならばこの圖もすぐわかる筈であ

との連結音ではなくして純然たる一つの子音である。單純な一つの子音をng の様に二字で表すのは紛はしい。之を一字で示すべきローマ字が無いから〔ŋ〕といふ新しい形の符號を工夫したのである。同様に日本の假名にも之を表すべき字が無い。例へばガクカ（學科）とカガク（科學）の如く、同じガの字を書いても語の始めに在る時（ガクカ）では〔ga〕といひ、語の中の（カガク）では〔ŋa〕といふ。〔ga〕と〔ŋa〕と二種の音を同じガの字で表す。（通俗的にいへばガの字を〔ŋa〕〔ga〕と二色によむ。）そこで假名文字を使つて音を書き別ける必要があればカ゚キ゚ク゚ケ゚コ゚の様な新工夫をしないと區別することが出來ない。（之は筆者の新工夫の字である。之に限つたわけでない。他の文字を工夫してもよいわけであるが、今は假にカ゚キ゚ク゚等を使ふことにする。）

シ

シといふ假名は五十音圖の中でサシスセソといふ所謂サ行の中に入つて居るが、その表す音そのものはサスセソの中の子音〔s〕とちがふ。是も本文字と發音とを混同してはならぬ一例である。シの中の子音は一種の無聲摩擦音である。よく演説會などで聽衆を靜めるために（シー）といふ音を出す人があるが、この音が正にシの中の子音と同じである。この時舌の前部（前舌面）が上つて硬口蓋の前部に近づきその隙間で摩擦音が出來る。サスセソの字音〔s〕も無聲摩擦音であるが、之は前述べた如く舌の先と上齒齦との間に隙間を作る。之に比べるとシの中の子音は上顎（硬口蓋）の稍奥の方まで舌面が近づくことになるから、試にスシスシの様に交互に發音して見ると、スの時よりもシの時の方が舌が引つ込む様な感じ（實は舌の稍奥の上が持上がる感じ）がある。このシの中の子音を〔ʃ〕の符號で表す。この子音は極め

て單純な一つの子音である。故に之を一つの字で表すのが適當のわけであるが、普通のローマ字には一つで表す字が無い。屢々shで表すが、之は〔s〕と〔h〕との合成音であるかの如く誤られる恐がある。よつて之も新しい符號〔ʃ〕を作つたのである。この無聲摩擦音〔ʃ〕の次に母音イを附けるとシといふ假名で表す音になる。この時舌は〔ʃ〕からイへ移る爲（イの爲め）の舌で始まる。〔ʃ〕にアを附けるとシャとなり、ウを附けるとシュとなり、エを附けるとシェとなり、オを附けるとショとなる。

ʃ —
a（ア）＝シャ
i（イ）＝シ
u（ウ）＝シュ
e（エ）＝シェ
o（オ）＝ショ

茲に注意すべきはシャシュ等の假名の書き方である。シャ等と書くとシとヤとの連結であるかの如く思はれ易い。之も亦文字と音聲と混同してはならぬ一例である。今音その者を調べて見ればシャは〔ʃ〕とアとの附いただけのものであること恰もマが〔m〕とアと附いただけであるのと同じ理である。故に同じ〔m〕といふ子音にアイウエオの附いたマミムメモを「マ行」と名づけるのと同じ方法で云へば、同じ〔ʃ〕にアイウエオの附いた〔ʃa〕〔ʃi〕〔ʃu〕〔ʃe〕〔ʃo〕は「シャ行」と名づけるべきである。從つてシはこの意味のシャ行の中に屬するのである。サシスセソをサ行と名づけるのは假名文字で書いた時の話しで「文字の一行」である。音その者だけを取つて同じ子音で一貫するものを一行と名づけ

ʃ＋a（ア）＝シャ
ʃ＋i（イ）＝シ
ʃ＋u（ウ）＝シュ
ʃ＋e（エ）＝シェ
ʃ＋o（オ）＝ショ

る流儀にすればシはシャ行に屬することになる。斯うなると同じ「サ行」とか「一行」とかいふ名稱が、文字を基にした時と音そのものを基にした時とで意味がちがつて來るから名稱を取扱ふにはよほど注意を要する。何でも名稱が同じならば物までも同じであると早合點をしてはならない。それなら今度は音その者を基にしてサ□スセソ即ち同じ〔s〕といふ子音にアイウエオの附く時、上の□の所に入るべきものは何かといふ問題が起る。之は即ち〔si〕である。之を表す

ツ

ts＋a（ア）＝ツァ
ts＋i（イ）＝ツィ
ts＋u（ウ）＝ツ
ts＋e（エ）＝ツェ
ts＋o（オ）＝ツォ

ツといふ假名で表す音は〔tsu〕である。この中の子音〔ts〕は破裂音〔t〕の要素と摩擦音〔s〕の要素の連結から成ること、恰も前のチ（tʃ）で說いたのと同じ理である。この子音に母音を附ければ上圖の樣になる。そのツァは俗語「お父さん」をオトッツァンといふ時に使はれ、その他はドイツ語の地名・人名等を日本語に寫して使ふ時、すぐに應用される容易な音である。

ジヂとズヅ

シの濁り。のジと、チの濁り。のヂとを比べ、又スの濁りのズと、ツの濁りのヅとを比べ、それが同じかちがふか、若しちがふならばどうちがふか。これよく人の提出する疑問である。第一、「濁り」とか「濁音」とかいふ名稱が色々な意味に使はれるから曖昧を免れないが、今「有聲音」といふ意味に定めて考へて見ることにする。而して發音器官の同じ部分で作る音につき無聲と有聲の一對を立てゝ考へることにすると、〔t〕は無聲音・〔d〕はその有聲音である。〔s〕は無聲音、〔z〕はその有聲音である。前にシの所で述べた子音〔ʃ〕に對し、その有聲音は〔ʒ〕といふ符號で表す。

シは〔ʃi〕であるならば、その「濁り」即ちシの中の子音を有聲にしたのは〔ʒi〕である。チが〔tʃi〕であるならばその「濁り」は同樣に〔dʒi〕である。スが〔su〕であるならばその「濁り」は〔zu〕であり、ツが〔tsu〕であるならばその「濁り」は〔dzu〕である。之は理論的にいふ區別である。今日の日本語でこの理論通りの區別が假名遣のジヂ、ズヅと共に實際に用ひられてゐるかどうかは別問題である。多くの地方では假名遣の區別に係らず音としては區別しない。即ち或地方では〔ʒi〕〔zu〕ばかりを使ひ

或地方では〔dʒi〕〔dzu〕ばかりを使ふといふ習慣がある。又個人的にも或人は常に一方だけを使ふといふことがある。東京語では假名遣に拘らず〔dʒi〕〔dzu〕を使つてゐる。或地方ではジヂ、ズヅを區別するといふが、その區別は前に述べた理論通りの區別であるかどうか、改めて調べて見なければならない。或地方で「向日ず」は mizu といひ「水」は midzu といふ如き事實があつたとすれば、それは〔zu〕と〔du〕との區別であつて前述理論通りの〔zu〕と〔dzu〕との區別ではない。成程どんな物でも唯ちがひさへすれば「區別」には相違ないのだから、〔zu〕と〔du〕でも〔tu〕でもその他何でもちがへば「區別」は確かにあるといへる。或地方で「ズとヅと區別がある」といふのを聞いて、直にそれが理論通りの區別であるかの如く早呑み込みをしてはいけない。

ラ リ ル レ ロ

これ等の假名で表される音の中に一種の子音が使はれる。これは日本全國の大部分に同じ樣な子音が用ひられるから、讀者は自ら發音しつゝ口の中で舌がどんな工合に働くか研究して見るとよい。日常急いで會話をする際ぞんざいな發音をするのを觀察すると色々變つた發音の行はれることを發見するが、今注意してラリルレロを叮嚀に發音して見ると、舌のへりが上齒齦に輕く附いて母音に移ると共に離れることを知る。此の舌の附き方が之と少しちがつて、上齒裏や齒齦に稍幅廣く附いて離れるとダディドゥデドの樣な音に聞える。我が國の或方言ではランプをダンプといひ、ウドン(饂飩)をウロンといふとよく人はいふが、それは右に述べた特質に基づくのである。ラ行の中の子音を發音符號で表す必要があれば〔r〕の字を使つて置いてよい。但しこれは必ずしも英獨佛等の〔r〕で書く音と同じだといふ意

ではない。單なる約束的の定めである。〔r〕がいやなら△でも〔 〕でも符號になりさへすれば何でもよいのである。

アイウエオ

アイウエオといふ假名で表される音は母音である。ローマ字を使つて發音符號とすれば〔a〕〔i〕〔u〕〔e〕〔o〕の文字を充てゝよい。母音を作るには、(一)こゑ、(二)口腔にこゑが響くこと、この二つが必要な箇條である。又外國語や日本各地の方言にはアイウエオの外に色々な種類の母音がある。これらは前に既に述べた(一七—一八頁參照)。今はアイウエオのちがひが如何にして出來るかを大略述べることにする。先づ上記二箇條の中、第二の口腔にこゑが響くといふ事に注意を要する。口腔が色々に大いさと形とを變へると、それに從つてこゑの響きが變つて來る。母音の區別はさうして生ずるのである。口腔の大いさと形とを變へる最も主なる原因は舌にある。勿論口腔を取り圍む口蓋も齒列も頰の内面も必要ではあるが、これ等はさう常に動くものでないから暫く勘定に入れない。舌の運動を起すには時として下顎の上下運動を行ふ必要もある。兩唇の開き工合も母音の區別を生ずる原因となる。しかし今主として舌だけについて云ふと、イの時は舌が高く上つて口蓋に近づき而も前の方へ寄る。ウの時は舌が上ることとイと同樣であるが、舌全體が口腔の中で奥の方へ引込むのである。それ故イ、ウ、イ、ウと交互に云つて見ると舌が前へ出たり奥へ引込んだりする運動を樂に分けることが出來る。アの時は口が大きくあく事誰も承知の通りである。殊に大きな聲ではつきりアを云はうとすれば下顎までも下げて口をあくことになる。この時は下顎と共に舌は下つて上顎(口蓋)から遠ざかることになる。エはイとアとの中間であり、オはウとアとの中間である。

前に述べた通り母音の區別を生ずる主な原因は舌の形と位置とであるが、唇も幾分か之を助けるものである。上下の兩唇を全く着けてしまふと息がふさがつてしまつて母音を出すことが出來ない。兩唇を少しでも離しておけばその間に孔が出來る。之を今假に唇の開孔と呼んでおかう。今イを發する時唇の兩角を左右に引いて開孔を一の字形に近い形にするとイの響きが一層はつきりする。又ウを發する時に、その反對に唇の兩角を左右から中央に向けて引寄せ、開孔を圓に近い形にする(俗におちょぼ口などゝいひ又口をすぼめるといふ)。かうするとウの響きが一層はつきりする。しかし日本語で日常自然に使つてゐる言葉では斯んな工合に唇をわざと力強く動かすことが無い。唯、オの時だけ極わづか唇の開孔を圓に近くするだけである。その他はイでもウでもアでも下顎の上下、舌の上下に從つて唇の開孔が自づと廣くなつたり狹くなつたりする。通俗の發音の說明圖や唱歌の教授用掛圖などにアイウエオの唇の形の畫がよく書いてあるが、これは右に述べた樣に、自然に伴ふ形である。よく「口形圖」といふ名稱が用ひてあるが、それは唇の「開孔圖」のことである。それよりも口腔の内部における舌の形や位置に注意するのが肝要である。

母音を發する時、軟口蓋は上がつて咽頭の後壁に附着し鼻への通路を塞いでゐるのが常である。もし鼻に通ずると「鼻ごゑ」の母音が出來る。日本語では鼻ごゑの母音は規則としては用ひない。

ヤ

ヤとアとを比べて見ると確かにちがふからヤはアの始めに何か「子音」が附いてゐることを知る。この「子音」を調べて見るとその舌の位置や音の作り方は母音イと同じであることがわかる。しかし「イ」「ア」と二度別々にいふのでなく

て「イ」の部分は極めて短く且輕く、直にアに移るので「ィア」の如く全體がマやカやサ等と同樣「一つ」にかたまつてしまふ。これを發音符號で表す時、イを〔i〕で表すとすれば、それを「短く輕く」發音するといふつもりで〔i〕を小さくして〔a〕の樣に表してよいわけである。その代りに〔i〕といふ字形に似た〔j〕を使つて〔ja〕として表すのである。かういふ〔j〕にアイウエオを附けると、〔ja〕はヤであるが、〔ji〕は結局〔i〕（イ）と同じになる。何故ならば、〔j〕は〔i〕と同じであり而も「一つ」にかためてしまふといふのだから〔ii〕を「一つ」にした〔i〕となるわけである。ウを附ければユとなり、エを附ければイェとなる。（九州の或地方でイェンピツ（鉛筆）などいふ發音が用ひられる。）オを附ければヨとなる。

ワ

ウとアとを比べて見ると僅かにちがふからワはアの始めに何か「子音」が附いてゐることを知る。この子音は母音ウと略〻同樣な音である。母音ウでは舌の根は口腔の奥の方へ高く上げられるので唇の開孔も之に伴つて狹くなる。ワの時はこの狹い唇の開孔を利用してアの始めに附け、次いでアを發すると之がワと聞える。この意味でこの子音を〔w〕といふ符號で表す。〔w〕にイを附ければ〔wi〕（ウィ）となる。例ダーウィン。エを附ければ〔we〕（ウェ）となる。例ウェリントン。オを附ければ〔wo〕（ウォ）となる。例ウォーターロー。ウを「附ける」とどうなるか。それは結局ウ一つと同じになる。前にヤの子音〔j〕にイの「附く」時は結局イ一つと同じであると云つたが、それと理窟は同じである。母音ウを云へば唇の開孔は自然にワの子音〔w〕と同じ形を作ふのだから、之を「利用」するもしないも無い。自然に行はれるのである。しかしワ（ウァ）〔wa〕を一つにいふのだから、〔wu〕即ち〔uu〕を一つに云へば、〔u〕になるわけである。

ハ　ヒ　フ　ヘ　ホ

ha＝ハ
hi＝ヒ
hu＝フ
he＝ヘ
ho＝ホ

是等の假字文字で表される音はアイウエオの前に一種の子音の附いたものである。この一種の子音を〔h〕で表す。故に上圖の如くなる。この〔h〕で表す子音は無聲の息が口腔を通る時に起す輕い摩擦音である。唯ハを云ふ時は口腔の形を始めからアの形にして置いてそこへ息を通して輕い摩擦音を作り、ヒを云ふ時は始めからイの口腔形を作る。フヘホも同樣ウエオの口腔形を作る。それ故詳しく考へれば口腔形は一々ちがふわけであるけれども、今それを暫く度外に置いて、唯口腔内に輕い無聲摩擦音が出來るといふ點だけは皆共通であるから、この共通點だけを抽き出して〔h〕で表すのである。又時としてハヒフヘホを強く力を入れて發音しようとする時、聲帶を接近させてその隙間で息の摩擦音を作ることもある。（而してこの音も亦〔h〕といふ符號で表すことがある。聲帶は喉頭の中にあるから之を喉頭摩擦音と名づけたり、左右兩聲帶の間の隙間を特に聲門と名づけるのでこの音を聲門摩擦音と名づけたりすることがある。）

ファ　フィ　フ　フェ　フォ

Fa＝ファ
Fi＝フィ
Fu＝フ
Fe＝フェ
Fo＝フォ

兩唇を近づけ開孔を狹くしてその隙間で息の摩擦音を作ることが出來る。机の上の塵をフッと息で吹き拂ふ時は之と同じ音が出る。之を〔F〕といふ符號で表す。之に母音を附けると上圖の樣になる。例へば野球のファン、映畫のフィルム、フェルトの草履、ユニフォーム（制服）等。又フカイ

（沸）フッツ（二つ）等のフに當る所ではこの〔F〕音が屢々用ひられ母音は却て消える。母音のウを附けた〔Fu〕は〔F〕の摩擦を特に強くいへば出來るが、通例の日本語でフネ（舟）等のフに當る所は〔hu〕と同じことになる。何となれば〔hu〕の〔h〕は母音〔u〕と同じ口形であつて兩唇の開孔は自然狹くなる。この時の息の摩擦が〔h〕で表される。〔Fu〕の中の〔F〕を特に強くいはない時口形（唇の開孔）は、〔hu〕の場合と同じである。

ヴァ　ヴィ　ヴ　ヴェ　ヴォ

近頃日本の新聞や雜誌にこの假名文字が多く用ひられる。これは多く歐米諸國のv字で表される音を表すつもりの字である。vで表す音は下唇を上齒に輕く當てゝその隙間で作る有聲摩擦音である。英獨佛語を學んだ人は屢々注意してこの〔v〕音を使ひ、日本語の中に交ぜていふ時も、ヴァイオリン、サーヴィス、心理學者ヴント、ヴェランダ、電流のヴォルト等といふ。（歐米の言語を知らない人にはヴァ等を何と讀んでよいかわからない。バビブベボで代用する人も有り、文字でもバイオリン、サービス等と書くことがある。）〔v〕に對する無聲摩擦音は〔f〕で表す。即ち下唇と上齒との間の無聲摩擦音である。野球のファン等の原語は fan で、本來は〔f〕音であるが、日本人は多く前述の兩唇無聲摩擦音（F）を代用してゐる。

拗　音

キャ　キュ　キョ　シャ　シュ　ショ　等を從來拗音と名づけてゐる。今は音その者の研究が主であるから、假名文字で何と書

くかは暫く別にして音その者を調べて見ると、キャで書く音は母音アを含んでゐること、カ、マ、等と同じである。この母音を除き去るとその前に或子音の附いてゐることを知る。この子音は發音符號で表すと〔kj〕である。即ち前に述べた〔k〕と同じ要素があり、この外にヤの中の子音〔j〕と同じ要素も加はつてゐる。やゝ詳しくいへば〔k〕の要素とは舌の後部と軟口蓋とを密着させて作る無聲破裂音である。〔j〕の要素とは舌の前部が母音〔i〕と同じ位置を取る輕い子音である。〔kj〕はこの二箇處の發音位置を合むものである。この「二箇處」といふ點が重要な特徴である。之に色々な母音を附けると、上圖の樣になる。〔i〕の附く時の〔ji〕は〔i〕であること前に述べた通りであるから、〔ki〕(キ)と同じものになる。これと同樣な例を探すと左の如きものがある。

kj+a＝キャ
kj+u＝キュ
kj+e＝キェ
kj+o＝キョ

ギャ＝gja　ギ゚ャ＝ŋja　ニャ＝nja
ピャ＝pja　ビャ＝bja　ミャ＝mja
リャ＝rja　ヒャ＝hja　(ギュ　ギョ　等は以上に準ずる、今は省く。)

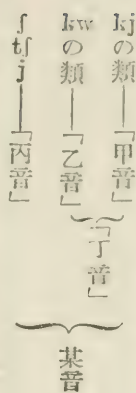
いづれも「二箇處」の發音位置を以て作り、その一つは〔j〕であるといふ點で同性質である。

クヮ　グヮ　と書く音は〔kwa〕〔gwa〕〔ŋwa〕といふ音である。やはり〔k〕〔g〕〔ŋ〕といふ發音位置と、〔w〕といふ發音位置と二箇處を合んでゐる。この音は日本語の或地方に限つて用ひられ、東京語には用ひられない。

シャ　シュ　ショ、チャ　チュ　チョ、ヂャ(ジャ)ヂュ(ジュ)ヂョ(ジョ)と書く音も通例拗音と名づけられるが、その子音の部分は前のキャ等とはちがふ。シャの子音は前に(三一頁參照)述べた通り〔ʃ〕であつて發音位置は一箇處である。キャ等の子音〔kj〕等を假に「二重子音」とか「複合子音」とか名づければ、〔ʃ〕は「單純子音」である。チャの子音〔tʃ〕は〔t〕と〔ʃ〕と二つの要素か

ら成るから、之も或意味で複合子音と名づけることが出來るかも知れないが、〔kj〕を複合といつたのと意味がちがふ。〔tʃ〕の發音位置は一箇處である。「複合」といつても〔j〕との複合ではない。〔ʃ〕は音の形が〔j〕と似て居るのでシャの子音〔ʃ〕も、チャの子音〔tʃ〕も耳に聞える結果何處かキャ等と似た所がある。こんな所からシャチャを從來拗音といふ同じ名稱の下に入れたのであらうが、音その者の性質にちがふ所があることを注意しなければならない。〔ʃ〕を拗音の中に入れるならば、ヤの子音〔j〕も同樣の發音位置による單純子音であるからやはり拗音の中に入れるべきである。

たゞ「拗音」といふ名稱は從來の慣用が定まつて居るから之を濫に變へるのは不都合であるかも知れないが、今音に音そのものの性質に基づいて類を作り之に新しい名稱を附けるならば、

kj の類――「甲音」
kw の類――「乙音」 } 「丁音」 } 某音
ʃ tʃ j ――「丙音」

の如くし、甲・乙・丙・丁・某の代りに何か適當な名稱を工夫すればよいであらう。

第四章　音　節

前にャを說明する處で、ャの中の子音〔j〕は母音〔i〕と同じ位置で發せられ、それが次に來る母音〔a〕と續いて一かたまりを成すと言つた。このャを「一かたまり」であるといふのはカだのスだのモだのを一かたまりであるといふのと同じことである。日本語に使ふ單語ヤマ(山)とか、スズメ(雀)とか、マモル(守)とかいふのは皆かういふ「一かたまり」が

幾つか連なつて出來てゐる（時にはエ「繪」、ホ「帆」など一かたまり一つだけで單語を成す者もある）。かゝる一かたまりを「音節」と名づける。故にヤマは二つの音節、スズメは三つの音節から成る單語である。

日本語を組み立てる音節には色々あるが、最も主たるものは一つの母音の始めに子音の附いたものである。本稿今迄にカとかサとかいふ假名を基にして說いて來たのは卽ち音節を取扱つたのである。而して一つの音節を分割して子音と母音とを別々に說明したのである。しかし中には母音だけで一音節を成す者もある。例へばアヲ（青）、イエ（家）、アオイ（葵）、オイオイ（追々）等はこれである。この外の者は大概一つの母音の始めに子音の附いたものが一つの音節を成す。その子音にはカ（ka）、マ（ma）、シャ（ʃa）等の樣に「單純子音」もあれば、キャ（kja）、ミャ（mja）等の樣に〔j〕を合んだ「複合子音」もあれば、チャ（tʃa）、ツ（tsu）の樣に破裂音の要素、同位置の摩擦音の要素といふ二つの要素を合んだものもある。いづれも是に母音が附いて一つの音節を作るのである。

今茲に音節と名づけたものは日本語で韻文を作る時に利用されてゐる。俗に五文字とか七文字とかいつたり、七五調などいつたりする七とか五とかは音節の數をいふのである。五文字などいふ「文字」とは假名で書いた時のことである。假名文字は多く一字が一音節を表してゐる。故に假名の字數がそのまゝ音節の數になるから大概それで差支ないことになる。唯「歌書よりも軍書に悲し吉野山」などいふ句で歌書をカショと假名で書くと三字になるが、ショは音節としては一つであるから、カショヨリモは五音節となり所謂五七五といふ徘句の形に合ふのである。この邊も亦文字と發音と混同してはならぬといふ一例になる。斯ういふわけであるからどれだけが一音節になるかといふ事を知るには或語句を以て韻文の形に作つて見ることが、一つの便利な方法である。從つてトーキョー（東京）の樣な語の「長音節」

も別に一つの音節を成すことになり、トーキョーは四音節であることを知る。

母音のない音節——促音と撥ね音「ン」・母音無聲化

以上述べた如く一つの音節には大概母音一つを含んでゐるが、この他母音無くして而も一つの音節に相當するものがある。例へばラッパ(喇叭)の樣にッの字で表すもの、ポンプの樣にンの字で表すものがそれである。これらは前述の如く韻文の中に入れて見るとッの字ンの字に當る處が一つに數へられるので之をも一音節の中に入れるのである。ッの字で書くものを從來「促音」と名づけ、ンの字で書くものを「撥ね音」と名づけてゐる。(撥音を字音で讀んでハツオンといふ人もあるが、之は音を「發する」「出す」といふ意味の發音と聞き誤る恐がある。) 促音とか撥音とか名稱は一つであるが、實際の音韻その者を調べて見ると色々あることがわかる。

ラッパといふ時ッの字で書く部分を調べて見ると、次に來るパの子音〔p〕と同じく兩脣を閉ぢて息を止めてゐることを知る。アパートの中のアパの部分とアッパレ(天晴)のアッパの部分とを比べて見ても同じである。アパ、アッパ等といふ時は兩脣を閉ぢて息を止めてゐる時間が極めて短い。故に次のアと合してパとなりパ(pa)が一つの音節をなすのであるが、アッパ、ラッパの時は兩脣を閉ぢて息を止めてゐる時間が稍長くて、丁度これが一つの音節に相當するのである。之を從來ラッパの樣にッの字で表してゐるが、ッの字は別にツル(鶴)とか、マツ(松)とかの樣に〔tsu〕といふ音節を表すにも用ひるため、又もや文字と發音との混同を生じて、ラッパのッも〔tsu〕と同じ音であるとか、少くとも〔tsu〕に何か關係が有りさうに思はれ易い。しかしラッパのッの字に當る部分は〔tsu〕と全く無關係なのである。之をローマ字で表

にした發音符號で表すには appa の樣に〔p〕の符號を二つ並べて表すのが一つの方法である。但しこれも〔p〕といふ破裂音を二回いふ場合と紛れ易い。卽ち先づ ap といふ〔p〕の破裂を作つて息を逆出させ、次に改めて兩唇を再び閉ぢて次の pa を作るといふ發音の仕方との區別が附き惜い。こんな二回破裂音を出すやり方は普通の日本語には無い。(英語などで ripe pear, deep part 等の二語を切つて發音する時に行はれる。)故にアツパ等は appa と書いて大した差支はあるまい。尤も之を ap:a と書くこともある。〔:〕この符號は直前に書いてある符號の音を引延す「長音符」である。〔pp〕の外にイツカ(ikka)「一家」、イツタイ(ittai)「一體」の樣に次に來る〔k〕や〔t〕といふ音の閉鎖を引延す音もある。之も假名のツの字で書いて促音の中に入れてゐる。イツサツ(一冊)といふ語のツの部も同樣である。この時は次に來るサの子音〔s〕を引延すのである。〔s〕は摩擦音であつて狹い隙間から息が續いて流れ出る。故にこの摩擦音は息の續く限り永く引延すことが出來るわけで、今イツサツといふ時はこの摩擦音を丁度一音節に相當するだけ延してゐるのである。之を發音符號で表せば issatsu と書くか、又は長音符(:)を使つて is:atsu と書く事が出來る。イツシャク(一尺)といふ語のツの字の部分も同樣で、次に來るシャ(ʃa)の子音〔ʃ〕の摩擦音を引延すのである。發音符號で書けば iʃʃaku 又は iʃ:aku である。一冊(イッサツ)も一尺(イッシャク)もツの字の部分はツ〔tsu〕と何の關係も無いのである。又ミツツ(三つ)、イツチ(一致)のツの字で書く部分は mittsu, ittʃi と書くとよくわかる通り、ツやチの中の〔t〕の閉鎖の部分を引延したものである。以上を纏めて見ると、上掲の如くなる。

ラ　ツ　パ—rappa
イ　ツ　カ—ikka
イ ツ タ イ—ittai
イ ツ サ ツ—issatsu
イツシャク—iʃʃaku
ミ　ツ　ツ—mittsu
イ　ツ　チ—ittʃi

いづれも次に來る音を引延すのであるが、その發音位置は一々次に來る音によつて異なる。この意味でいへばツの字一字で書くけれどもその表す音聲は色々な種類があるといふことになる。しかし又一方からいふと音聲は色々であるが、（一）次に來る子音を引延すこと、（二）息がつまるといふ感じを伴ふこと、（三）一音節に相當すること、是等の點に於ては總て共通である。故に音聲が一々ちがふといふ點は暫く顧みないで共通點だけを抽き出して考へると、之を一つに纏めることが出來る。ツといふ文字はこの共通點だけを示す符號であると考へれば便利な符號であり、促音といふ名稱もこの共通點だけに附けた名稱であると考へれば便利な名稱である。唯一つ困ることはツの字が〔'su〕との區別を明かにしない點である。之を區別するには假に平假名の「つ」の字を混用して、ラつパ、イつカ等とするのも一つの方法であらう。

撥る音ンについても促音と同樣なことがいへる。即ちンの字は一字であるけれども、その表す音聲を考へると色々あるといふのが一箇條である。之を簡單に記すと左の如くになる。

ン＝m——p　シ　ン　パ　イ　ʃimpai（心配）
　　　　b　ニ　ホ　ン　バ　シ　nihombaʃi（日本橋）
　　　　m　サ　ン　マ　イ　sammai（三枚）

ン＝n——t　ハ　ン　タ　イ　hantai（反對）
　　　　d　サ　ン　ド　sando（三度）
　　　　n　ア　ン　ナ　イ　annai（案內）

k　サ　ン　コ　saŋko（三箇）
ン＝ŋ─g　シハンガッコー　ʃihaŋgakkoo（師範學校）
n　オ　ン　ガ　ク　oŋŋaku（音樂）
ン＝ŋ̃─母音　ホ　ン　ア　ン　honan（飜案）
j　ホ　ン　ヤ　ク　hoŋ̃jaku（飜譯）
w　コ　ン　ワ　koŋ̃wa（混和、懇話）
s　ホ　ン　ソ　ー　hoŋ̃soo（奔走）

即ち次に來る子音の如何によつて一々ちがふ音が發せられる。〔m〕はマ（ma）の中の子音、〔n〕はナ（na）の中の子音、〔ŋ〕はカ（ŋa）の中の子音と同じである。〔ŋ̃〕といふ符號は〔ŋ〕に似て後舌面が軟口蓋に密着せず、少し隙間を殘す鼻音の符號である。斯樣にンといふ一字が色々異なる音を表すのであるが、又一方からいふと、是等の中に共通點もある。それは（一）鼻音であること、（二）一音節に相當すること、これである。今この共通點だけを抽き出して考へると是等を一つに纏めることが出來る。ンといふ字はこの共通點だけを示す符號であると考へれば便利な符號である。

次に母音の無聲化といふ事を說明しよう。例へばキシャ（汽車）といふ語のキの字の部分を考へて見ると、東京語その他の地方の發音で、キ（ki）の中の〔i〕といふ母音の「こゑ」が無いといふ事實を發見する。もう少し詳しくいふと、〔i〕といふ母音を發する口腔の形を作つて置く、即ち舌を前の方へ寄せ前も硬口蓋の方に近づかせる。この形を作つて置いてそのまゝ「こゑ」を出してこの口腔に響かせると〔i〕（イ）になるわけであるが、こゑを出さずに息だけを出すと口の

中で息の輕い摩擦が起る。この音はやはり何處となくイに似た響きをもつてゐる。これを「無摩化した母音」と名づけることがある。一層やかましく云へば是を母音といふのは良くないわけである。前に、母音には「こゑ」即ち聲の響きとの二つ條件が必要であると云つたのに、今こゑの無いものを母音といふのは、恰も「年を取らない老人」といつた樣なもので矛盾した名稱になる理窟である。しかし多少名稱は不都合でも比較的簡單で早わかりがするから「無摩化した母音」とか「母音の無摩化」とか「無摩母音」とかいつて置くことにしよう。そこで前のキシャといふ語のキの部分には母音が無摩化するのである。(勿論日本の或地方の發音では無摩化せずにちやんとはつきり前のキ「ki」を出すからこの時は問題は無い。)この無摩化を示すため ki̥ʃa の樣に母音の符號[i]の下に小圓を附ける。假名ではまだ世間に一定した符號が行はれてゐないが、筆者(神保)はキの樣に記すことにしてゐる。この類はキばかりでなく、イッヒャ(一匹)等にもある。シカ(鹿)チカイ(近)等のシ・チも同樣であるが、この例では[ʃ]や[tʃ]の[ʃ]といふ摩擦音自身が[i]と同樣な口の形(舌の位置)で作られ耳に聞える響きも[i]に似てゐるので、[i]の無摩化といふことは結局母音[i]のこゑが消えて[i]母音の響きが子音[ʃ]で代用されるといつて良いことになる。同樣の事は母音[u]を含む音節にもある。例へばクサ ku̥sa(草)、スコシ su̥koʃi(少し)、ツキ tsu̥ki(月)、イップク ippu̥ku(一服)等。これらは ksa, skoʃi, tski, ippku と書いても結局同樣になり、[k・s・p]等の子音の響きに母音[u]と似たものを含んでゐるので之を以て代用するといつた有樣である。又ヒト(人)といふ時の[hi]の所で[h]は元來既に[i]の口腔形を始めからもつてゐて唯息の輕い摩擦を作るのだから、母音[i]が無摩化すれば、[i]の形をもつた[h]と同じことになる。たゞ實際發音する時[i]の響きを明瞭にするため、この息の摩擦を稍々強くいふことがある。發音符號でかゝる稍々摩擦の強い音を特に[ç]かういふ符號で表すこと

があるから、之を借りればヒトのヒの部の摩擦の稍強い場合を çto と書くことが出來る。又、フタツ(二つ)などの例のフ〔ɸu̥〕の所で母音〔u〕は兩唇の開孔が自然に狹くなる。(三八頁參照) から、無聲化すると口腔内の息の摩擦と共に兩唇の間の息の摩擦も耳に聞えることがある。ことに母音が無聲化したため〔u〕の響を明瞭にしようとして兩唇間の摩擦を稍〻强くいふことがある。斯うなれば前に(三八頁) 說明した〔F〕と同じ音になる。するとフタツは Ftatsu と書いて表すことも出來る。この〔F〕の響きで母音〔u〕の代用にしてゐるのである。

以上母音の無聲化した發音も音節としては皆一つの音節に相當するのである。而して以上に擧げた色々の實例をよく調べて見ると、母音の無聲化には必ず一定の規則があることを知る。それは母音が二つの無聲子音の間に在る時に限るといふことである。前の例で〔p〕〔k〕〔s〕〔s〕〔h〕は皆無聲子音である。これらの中どれか二つが前後に來て母音が間に挿まる時その母音が無聲化する。故に一方だけ無聲子音で他が有聲子音(母音も)である時は無聲化しない。例へばキモノ kimono (着物)のキ(ki)の母音〔i〕は無聲化しない。何故なら〔i〕の前は無聲子音〔k〕であるが、〔i〕の次はモ(mo)の〔m〕が來る、〔m〕は有聲音だからである。無聲化する母音は〔i〕と〔u〕とが最も多い。稍〻速くいふ言葉ではカヽツタ(掛つた)、ココ(此處)の如く〔a〕や〔o〕の無聲化することもある。

第五章　アクセント

アクセントといふのはよく人が話題に出す樣に、ハシ(橋)とハシ(箸)、ハナ(花)とハナ(鼻)などのちがひの事である。このちがひ方は地方によつて異るが、今東京語について考へることにする。

ハシ(橋)とハシ(箸)とは所謂發音は同じである。詳しくいへば、之を組立てる子音や母音及びその連結順序は同じく hashi である。しかしこの二つの語は何處かにちがひがある。何となくちがふといふ事だけは音聲學を全く知らない素人でも誰でも皆知つて居るが、然らば如何なる點がどうちがふかとなると、明かに言ふ事が出來ない人が多い。そこで之を音聲學上研究して見る必要が生ずる。

先づ第一にハシとハシのちがひは聲の調子の高低にある事を知らなければならない。調子の高低とは聲の大小とはちがふのである。オルガンやピアノの向つて左の方の鍵盤を押して(又は打つて)出る音は低い音である。右の方から出るのは高い調子である。音階のドレミファソラシドと試ふドレミは低い方で、ソラシドと段々高くなる。同じドの音でも大きな聲でいふのと小さな聲でいふのとは強弱のちがひである。調子の高さは全く同じドである。この意味で「橋」と「箸」とのちがひは聲の調子の高低にあること、而して「橋」の方はハの方が低く、シの方が高いこと、「箸」の方はハが高くシが低いことを先づ明かにしておかなければならない。

それならば聲の強弱の方はどうであるか、實際ハシ(箸)と發音して見るとハの方が高い事はわかるが、同時にハの方が強くも發せられるではないかといふ問題が生ずる。之については次に「單語に固定してゐる」といふ事柄を考へなければならないことになる。

「箸」といふ語のハの方が高いといふ事は、東京の人ならば誰でも又どんな場合にもこの語をいふ時必ずハの方を高くするといふ事である。何故必ず高くするか、それは別に理由は無い、唯昔からの習慣でさう定まつて居るといふだけである。こんな習慣が何時どうして出來たか、それはわからない。又わかつても今の研究には大した關係が無い。

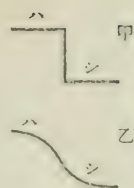
唯さういふ習慣が江戸の昔から傳はつて來て、今日の東京の習慣にも行はれてゐるといふだけを知つてゐればそれで澤山である。故に、東京の習慣に從つて云はうとするには之に從はなければならない。この意味でハを高くする事は「箸」といふ語に固定してゐると稱するのである。さうすると、強弱の方は或場合に人の發音した聲を聽くとハの方が強かつたといふことはあらう。しかし誰でも又如何なる場合にも必ず強くいふのではない。強くいはない事もある。從つて強くいはないと習慣に合はないなどゝいふ事がない。この意味で強さの方はこの語に固定してゐると稱しないのである。

さて次に「箸」といふ語でハの方を高い調子でいふ事が固定してゐるといふが、それではどの位高いのかといふ事が次の問題になる。この時先づ明かにして置かなければならないのは「實際の高さ」といふことである。もつとむづかしい名稱でいふと「絶對高度」といふことである。これは一秒時間の振動數によつて定まる。オルガンの眞中のハ調のド(c')を押して見ると一定の高さの音が出る。それより一オクタブ上のド(c'')を押すと振動數が丁度二倍の一定の高さの音が出る。人の聲も同樣である。實際に聲を出して見ると何かしらの絶對高度がある。女が聲を出すとずつと調子の高い別の絶對高度の聲が出る。今「箸」などいふ語のハが高いとか何が高いとかいふのは、この意味の絶對高度（實際の高さ）をいふのではない。箸といふ語は低い聲でも云へるし高い聲でもいへる。男も云へるし女も云へる。その度に實際の高さは一々ちがふが、ハシは依然としてハシでハの方がシよりも高いのである。そこでわかることはハの方が高いといふのがシよりも比較的に高いといふことである。之を譬へて見れば、數の多い少いといふ關係と似てゐる。8は5に比べれば多いが10と比べれば少い。百は8に比べれば遙かに多いが一萬に比べれば少い。8とか5とか

百とか萬とかは絶對數で一々一定であるが、他の數と比べた時に比較的に多いとか少いとかがいへる。之と同じことで、男の聲でも女の聲でもハの方が比較的にシよりも高いといふ事が「箸」といふ語に固定した條件なのである。

しかし又もう一つ注意すべきことがある。それは音樂でいふ音階と比べることである。音階は例のドレミファソラシドといふ名で歌ふことになつてゐるが、これはやはり「比較的」の高さのちがひを排列したものである。例へばドミは三度音程であるとかドソは五度音程であるとか云つて、音階中の二つの音の隔りを音程と名づけてゐる。これは所謂ハ調でもト調でもニ調でもドミといふ三度音程は同じことである。オルガンの鍵盤の何處から始めてもドレミ等の音階をひく事が出來る。しかし「箸」などゝいふ語の高低は比較的のちがひであるといふが、音階の樣な一定の音程も定まつてゐないのである。即ちハが高くシが低いといつてもその差が、ミドであるか、ファドであるかソドであるか定まつてゐない。つまりどれでも良いのである。實際人が「箸」と發音したのを調べて見ると丁度ミドの事もありファドやソドなどの事もあるし、否さう精密に音階通りに行かないで、ファドともつかずソドともつかずその中間のこともあらう。この通り實際は人により場合により種々雜多な高さのちがひが出來るので、之は勿論固定といふわけに行かない。唯一つ定まつてゐるのは「箸」といふ語ではハの方がシよりも高いといふ事だけである。どんな高さでも良いから唯何でも高ければ良いのである。

更にもう一つ細かい事をいふと、「箸」といふ語でハが高いシが低いといひ、その高さは何でも良いといつたが、試みにオルガンで「箸」といふ語の眞似をして例へばミドと二つ續けて鳴らして見る。又はファドだのソドだのを鳴らして見ても、高さは何でもよいのであるから、ミド、ファド、ソドでも良いわけだが、オルガンでやつて見ると自然の言葉と

何處かちがふ様に聞える。それはどういふわけかと云ふに、オルガンでは一つの鍵盤を押して居るといつ迄も同じ高さの音が續いて出る。而して次の鍵盤を押すと一足飛びに別の高さに移る。然るに自然の言葉でハシ（箸）と發音するとハからシへ次第に少しづゝ低くなつて行く。之を圖で示すと上圖の如く、オルガンでは甲の様にいはゞ垂直に飛び下りるが、自然の言葉では乙の様に曲線的に下りて行く、こゝにちがひがあるのである。唯日常自然の言葉では發音の進行がかなり速いから、この様な曲線的に上下するちがひを精しく耳で聽き分けない。その中の著しい所だけが聲の調子として知覺される。故にハシ等の語についていへば大體ハが高くシが低いといふ丈けで十分なのである。

そこで以上に述べた所を纏めてみると「各單語に固定した聲の比較的高低」、これを名づけて國語のアクセントといふ。俗には或單語の中で聲の高くなる所だけにつき「此處にアクセントがある」等といふ云ひ方をする人がある。アクセントといふ名稱の意味の附け方は人々の勝手で色々に出來るであらうが、今この稿では右に纏めて述べた意味をアクセントと名づけることにする。世間の人がアクセントといふ名稱を使ふ時、名稱が同じであるからといつて意味までも常に同じであると早呑み込みをしてはいけない。

さてアクセントといふ名稱をこの意味にきめたとし、次に之に就いていふべき事が色々ある。その中先づ始めにいふのは單語といふものである。我が國語の單語にはハ（葉）、キ（木）など一つの音節で一つの單語を成すものがあり、ハシ（箸）の様に二つの音節の單語もあり、カラス（鴉）の様に三つの音節の單語もあり、その他四つ五つ等種々ある。而して今アクセント研究のため必要なのは、ハシガ（箸が）とかカラスノ（鴉の）とか名詞に「テニヲハ」の附いたものを

ハシ、カラス等とはちがふ別の一つの單語とし、ヨム(讀)といふ動詞が一つの單語であると共に、ヨマナイ、ヨミマシタ、ヨメバ等、所謂助動詞やテニヲハの附いたものを一々別々の單語とすることである。何故必要かといふと、アクセントの高低關係はヨムとヨメバとヨマナイと別々に定まつて居り、ハシとハシガとハシノと別々に定まつて居るといふ事實があるので、ヨムは二音節の單語、ヨメバは三音節の單語、ヨマナイは四音節として取扱はないと研究が十分行き屆かない。更にもう一つの理由は、バとかノとかいふ所謂テニヲハ等は自然の言葉で發音上一つに切離していふ事がない(所謂獨立しない)。必ず上の語と續けて發音する。文法の方から云へばヨメは動詞、バはテニヲハといふ風に別々のものと考へるであらうが、今は發音の研究である。發音は發音の事實に基づかなければならない。

次に考ふべきは單語の中の高低關係のことである。前に述べた樣な理窟によりハシ(箸)といふ語のハが高くシが低いといふ。こんな工合に一々の音節について高い低いをいふのが研究上便利である。そこでこの高低關係を符號に表すため、片假名で單語の發音を表し、その中の高い音節の部分の假名の右側に縦線を引いて、ハ|シ(箸)とし、假名を横書にする時は上に線を引いて、ハシ(箸)の如くする。

この表記法を使つて今迄出した單語を表して見ると、

ハシ| (橋) 之はシの方がハよりも高い。

カ|ラス (鴉) 之にカがラスよりも高い。以下說明を省く。

ハシガ| (橋が)　　カ|ラスノ (鴉の)

ヨム (讀む)　　ヨマナイ (讀まない)

ヨミマシタ（讀みました）　ヨメバ（讀めば）

こんな工合になる。ヨミマシタなどはミマと續けて高くいひ、マからシへ移る所で調子を下げる。（ミの左側の△の符號は母音の無聲化を示す。四六頁參照）。

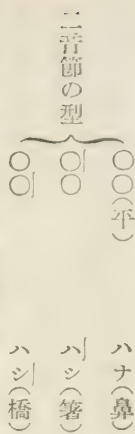
それから右の外に次の様な單語もある。例へばハナ（鼻）、ハシ（端）、スズメ（雀）、トマル（止）、サイタ（咲）、等。これらの單語はその音節の中どれを特に高くするといふ定まりが無い。いはゞ全體を大體平にいふ。勿論實際の發音では、平といつてもオルガンの一つの鍵盤を永く押して居る様な一本調子でなく、多少樣の調子の上下が顯れるけれども、之は人により場合により一々變化することがあるもので、前に云つた意味の固定ではない。固定といふことを云ふとすれば、是等の單語は調子の高低を附けないことが固定してゐるといつて良い。かういふわけでこの種の單語のアクセントを「平板式」アクセントと名づける。而して前に擧げたハシ、カラス、ヨマナイ等の様に、單語の中でどの音節かが高く發音されることが固定してゐるものを「起伏式」アクセントと名づける。

平板式アクセント

平板式アクセントは單語の中でどの音節を高くするか等の事が定まつてゐないものであるから、話は甚だ簡單である。唯次の様な事實に注意すればよい。例へばハナ（鼻）は平板式である。之にテニヲハの附いた語、ハナワ（鼻は）、ハナニ（鼻に）、ハナノ（鼻の）等と比べると、テニヲハの附いた三音節の語もやはり平板式である。けれどもハナニワ（鼻には）、ハナデモ（鼻でも）等の様にニワ、デモ等テニヲハの二つ附く例では右の様な起伏式のアクセントでいふ。

自然の言葉で實際に發音する時、スズメノコエガキコエル（雀の聲が聞える）、キニスズメガ……（木に雀が……）等の樣に、スズメは平板式であるが、文句の始めに附けていふ時は始めのスといふ音節が幾分低く發音される。色々細かく研究すればまだ色々な事があるだらうが、實用的には右の二三の事柄に注意するだけで十分であらう。

起伏式アクセント

起伏式アクセントをもつ語には色々の種類がある。ハシ（箸）、アメ（雨）、ヨム（讀む）、マダ（未）、ナイ（無い）等は皆二音節から成る單語で、その第一音節が高い。文法上の品詞からいへば、名詞・動詞・形容詞・副詞など色々あるが、アクセントからいへばいづれも同じである。故に之を纏めて「○◌」の樣な「型」に屬するといふことが出來る。「○◌」の圓の符號は何でもよい一つの音節を示す符號である。又ハシ（橋）、イヌ（犬）、ホネ（骨）は「◌○」の型に屬する。それに前のハナ（鼻）、トブ（飛ぶ）等の平板式の型を加へると二音節語には左の三種の型があることを知る。

エ（繪・柄）、キ（木、氣）、ホ（穗・帆）、など一音節の語にも區別がある。しかし一音節の語を單獨に切り離して發音したのを聽いただけでは高いとも低いとも區別がわからない。又實際の言葉ではエオ、カク（繪を書く）、キニ、ノボル（木に上る）等と他の語尾にテニヲハを附けていふことが甚だ多い。かうなれば前に述べた注意によりエオ、キニは

二音節の單語である。而して二音節では他の音節との比較上、エやキが高いといふことがはつきりわかる。左の如くテニヲハの附いた二音節の單語を調べて見ると、

起伏式	平板式
エオ（繪を）	エオ（柄を）
キニ（木に）	キニ（氣に）
ホガ（穂が）	ホガ（帆が）

の様に右側は起伏式（○○型）、左側は平板式といふ區別のあることが明かになる。か丶る例と比べて見た時エ、キ、ホ等の一音節だけで一つの單語を成すものがそれ自身高いとか低いとかいふ連想を伴ふことになり、この意味で一音節單語のアクセントが起伏式か平板式とかいふことがいへるのである。

次に三音節單語を調べて見ると、左の如き種類のあることを知る。

平板式　スズメ（雀）　トマル（止る）　トテモ（到底）

起伏式
- カラス（鴉）　ヨンデ（讀んで）　カナリ（可なり）
- カキネ（垣根）　ハヤイ（早い）　ウゴク（動く）
- アタマ（頭）　タカラ（寶）　ハナミ（花見）

理論的に考へればこの外○○○、○○○等の型を作り得るわけであるが、東京語では實際かういふ型で發音する單語は一つも使はれない。又前述の二音節語にテニヲハが附いて三音節を成すものもこの中のどれかに入る。即ち、

平板式　ハナガ（鼻が）　スズメと同型

起伏式 ⎰ ハシガ(箸が)　　カラスと同型
　　　 ⎱ ハシガ(橋が)　　カキネと同型

又右の例でスズメ(平板式)とアタマとを比較すると、單獨に切離して實際に發音するのを聽いただけでは區別が附き憎いものである。しかし、この二種は著しいちがいがある。それは更に之にテニヲハの附いた四音節語と比べると、

スズメガ　　アタマガ

の様に平板式のスズメはテニヲハの附いた語もやはり平板式であり、アタマはテニヲハの附いた語でテニヲハ(ガ)の部分が低くなり、四音節語全體がやはり起伏式である。是に於て次の原則のあることを知る。

名詞のアクセントは次にテニヲハが附いても變らない。

う少し正確にいふと、名詞(その他代名詞等テニヲハの附くことのある單語)と之にテニヲハの附いた語とを比較するに、名詞、及び上記その他のもの)の部分のアクセントは同じ型である。但しテニヲハの中「ノ」だけはこの原則に對して例外をなす。例へば、

ハシ(橋)　　ハシノ ⎫
アタマ(頭)　アタマノ ⎭(平板式)

の様に前の語の最後の音節(上記…シ、…マ)が高い語に限り、ノの附く語が平板式に發音される(元の名詞のアクセントが變る)。勿論ハシ、ハシノ(橋)、カラス、カラスノ(鴉)、カキネ、カキネノ(垣根)の如きは原則通りである。

四音節又はそれ以上の單語については右に述べたのと同様であるから玆には省くことにする。

第六章　實地の言葉における發音

本稿の始めから述べて來た子音・母音・音節・アクセント等の事柄は我が國語（主として東京語）で現在日々使はれてゐる言葉を觀察して得た結果である。日本人が日本語を使ふのは、日本語を知つて居り覺えてゐるからである。何故日本語を知つてゐるかといふと、生れてから周圍の人々が實地に日本語を使ふのを聽いたからである。生れながらに日本語を知つてゐたのではない。かくて日本語を聽き覺えれば今度は自分で實地に使ふことも出來、且つ實地に口を動かさないで單に心の中に發音を思浮べることも出來る。それ故發音の研究には他人や自分が實地に使ふ言葉を聽く方面と、知つてゐる發音を心に思浮べる方面と兩面から掛かることが必要である。實驗器械を用ひて發音の振動を細かに記錄する仕方は聽き分ける方面の仕事を補助する方法である。

音聲學で研究するのは主として言語の音聲である。日本語の發音を研究するのは日本語といふ言語の音聲を研究するのである。一體言語の音聲は何か意味を表すための音聲であつて、この點で無意味な出たらめな音聲とちがふ。今實地の言葉の發音をよく調べて見ると、例へば「一寸來て呉れ」といふ言葉でも、叮嚀にゆつくり氣を附けていふ場合と、急いでぞんざいに云ふ場合と發音の工合が大分ちがふ。「來て」といふキの音といつても、キは〔ki〕の音で、〔k〕は舌の後部が軟口蓋に附いて破裂音を作るといふが、ぞんざいな言葉で「來て」といふ語のキに當る部分で實際舌と軟口蓋と附着せず從つて破裂音を作らずに終つてしまふ事がある。斯ういふ時、言葉の意味を考へずに純粹に音響ばかりを問題にして論ずれば破裂音と破裂音に非ざるものとは抑〻ちがふ音であるといふ理窟になる。今この二種別々の音を

一緒にして論ずるのは共に「來て」といふ意味を表す所が共通だからである。この共通な點を緣として兩者を一緒にするのである。本稿で始めから述べて來たのは、日本語といふ言語の音聲卽ち意味のある音聲の中、氣を附けて叮嚀に發音する場合だけを觀察し、誰が如何なる場合に使ふ言葉でも氣を附けた叮嚀な發音の場合には必ず顯れる性質を抽き出して述べたものである。この意味で、今迄述べたのはやはり實地の言葉の發音である。唯實地の發音の中の一部分の性質だけを抽き出したのである。又一方からいへば斯樣な實地の言葉の叮嚀な發音は日本語を知つてゐる人ならば誰でも思出し得るものであるから、今迄の記述は記憶した音聲、思浮べた音聲としても當てはまるのである。

右の如く、本稿に述べた事柄はやはり實地の言葉の發音にはちがひないのであるが、唯叮嚀な發音で誰でも如何なる場合にも顯れる性質だけを取り出したものであるから、是だけでは實地の言葉における發音の全部を說き盡したことにならない。全部といへば或某といふ特殊な一人が何か特別な一つの場合に實地使つた言葉の發音を全部記述し說明し盡さなければならぬわけであるが、それはたとひ不可能でないとしても、かなり複雜であり困難である。今はしかしそれ程大袈裟に考へないで、實地の言葉に屢〻顯れる事柄、今迄の記述にまだ入つてゐない事柄を考へることにする。それだけならばさほど困難でなく而も必要なことである。

この趣意でいふべきことは、實地の發音に於ける、

（一）斷　　續（聲の切れ目及び續き工合）

（二）速　　度（話が速いか遲いかの區別）

（三）抑揚調子（聲の强弱と調子の高低上下）

の三つの場合である。

斷　續

先づ斷續についていへば、話のいひ始めといひ終りとはそれ〴〵一つの言葉の境目をなすもので、廣い意味で切れ目といへるわけであるが、之は分かり切つたことだから今省くことにする。話の途中でも處々で聲を切ることは常に行はれる。その切れ目にも色々あつて例へば「今日は天氣がよいから」と一續きに發音して「から」の終で切ることもあり、「今日は」で切ることもある。この切り方は或程度まで人々の自由に作ることが出來る。或程度といつたのは、言葉を使ふ目的からいつて他人に意味を了解させようとするのに、餘り無茶な切り方をしたのでは目的を達しないから切つては良くない場合もあるといふことである。「天氣」といふ語も、勝手に「テン」とか「テ」とかで切らうとすれば切ることは出來るわけであるが、それでは「天氣」といふ語の意味が通じないから、意味のわかるといふ條件の下に於てでなければ自由に切ることが出來ないのである。斯く或程度まで自由に聲の切れ目を附けることが出來、一つの切れ目から次の切れ目までは聲が切れずに引續く。この一續きの中には例へば「今日は天氣がよいから」等の樣に所謂單語が二つも三つも連結することがあるが、單語と單語との間に聲の切れ目は無いのである。しかし又別の實地の言葉を調べて見ると、「今日は」「天氣が」等の樣に切れ目を附けることもあるから、之を總括していへば「今日は」といふ語はその終で聲を切ることが出來るといふ。この意味でいふと「天氣」といふ語は實地の言葉で是よりも短く切ることが無いから、是よりも短く切ることが出來ないといふ。然るに「天氣が」といふ語はやはり是よりも短く切ることが出來

ない。何故ならば「か」といふ語はその終めで切らず常に上の語に附けて發音するからである。斯ういふわけで前にハシ「箸」を一つの單語としハシノ（箸の）を別の一つの單語と名づけたのである。（五一—五三頁參照）

速　度

次に話の速度のことを考へて見よう。早口に話をしたり、ゆつくり物をいつたりするのを今速度と名づける。話の速度は人により場合により色々のちがひがある。「一寸待つて下さい」などいふ同じ文句でも、急いだりあわてたりして言ふ時は速くなり、ゆつくり落附いていふ時は遲くなる。又個人々々で特有な癖もある。或人はいつも早口に物をいふ癖があるなどはそれである。この速度は人が物をいふ時心持の動き方で自然に變ることがある。わざと速く言はうと計畫しないでも氣がせく時はおのづから速くなる。これ自然の表情の一つである。之を聽く人はその速い言葉を聽いてその人が氣がせいてゐることを察することが出來る。併し今實地の場合から離れ、單に文句として心の中に思出した時は「一寸」とか「待つて」とかいふ語句はどの位の速さでいふか確定的に思出すことが出來ない。單に「實に使ふ時は色々の速さがある」といふだけで、この語句自身には固定してゐないのである。

抑揚調子

次に抑揚調子について述べる。抑揚とか調子とかいふ名稱は世間で色々な意味に使ふから、唯いきなり抑揚調子などゝいふと曖昧を免れない。今茲には實地の言葉における聲の強弱の變化を抑揚と名づけ、高低の變化を調子と名づ

けることにする。人が實地に言葉を使へばその音聲に必ず何かの强弱と調子が顯れる。强弱が全く無いとしたら言葉が無くなつて何も耳に響かないことになる。調子の方は主として聲帶の振動による「こゑ」に顯れる。その振動が例へば一秒時間に何回といふことによつて調子の絶對高低が定まる。この振動數が零になるか又は餘りに多い時に音聲として耳に響かないことになる。但し日本語を組織する語句としては、强弱の方は特に一定の强弱關係を附けるといふことが各單語に固定してゐない。之に反し、高低の方は各單語に或高低を附けるか附けないかが固定してゐる。これ前に說いた日本語の「アクセント」である。所が實地の言葉として發音すると必ず何かの强弱と高低が顯れ、これが言葉の進行中色々に變つて行くので世人のいはゆる言葉の抑揚とか調子といふものを作るのである。今茲にいふ抑揚はこの强弱の變化進行をいひ、調子は高低の變化進行をいふのである。

實地の言葉における抑揚と調子とは、前の斷續や速度について述べたと同樣、人により場合により千變萬化樣々になるから之を盡く詳しく記すことは出來ないが、大體或場合にこんなこともあるといふ位の事ならば說くことが出來るし且必要である。その一つの事柄はアクセントと調子との關係である。アクセントも聲の高低に基づき、言葉の調子も聲の高低に基づく。兩方とも聲の高低が基になつてゐるのだから、兩者の關係のあること言ふ迄もない。前にアクセントは聲の比較的高低をいふと述べた（五二頁參照）。　この比較的を實際どの位高くするか低くするかが言葉の調子となる。例へば「アシタワ　オテンキダ　ソオデス」といふ文句のアクセントは縱線で示した通りである。これを實地の言葉に使ふ時アシタワの方を强くいはうとすると聲の調子も高くなつて「…シタ…」の部分が著しく高い調子になる。その次のオテンキのテは「オ…ンキ」といふ他の部分と比べれば稍〻高いが「アシタワ」のシタと比べてそれ程高く

ならない。その反對に「お天氣」といふ語を强めようとすると聲の調子が同時に高くなつて、「オテンキ」のテの部分が著しく高く、前の「アシタワ」の「…シタ…」の部よりも遙に高くなる。かういふ工合で、アクセントといふものは一つの單語だけにつきその一部分（或音節）が他の部分より高いか低いかといふ事に名づけたのである。二つの單語を並べて甲の單語の高い所と乙の單語の高い所とどちらが高いか、又は同じ高さかといふことに定まらないのである。これは實地の言葉の人により場合によつて色々に變るから「固定」してゐるといへない。故に之は言葉の調子の方に屬する事柄であつてアクセントではないのである。

實地の言葉における調子についてもう一ついふべきは、所謂語尾の上げ下げである。例へば「アナタノオスマイワドチラデスカ」（貴君の住所は何處）といふ文句を實地に使ふ場合、デスカの終の方で調子を段々と高くする。これ語尾の調子を上げるとか尻上りにいふとか稱せられることである。又別の場合には同じ文句でも尻下りにいふこともあつて、それぞれその場合の心持のちがひを表すことになる。斯ういふ工合に場合によつて一々變ることがあるから調子は文句として固定してゐない。又、語尾といつても「…デスカ」の所ばかりでなく、「アナタノオスマイワ」の終で、ワの邊でも一ぺん聲の調子を上げることもある。之は言葉の區切りであるが、之も「語尾」の上げ下げといふ中に含めてよい。

以上實地の言葉に於ける發音の中、音聲の斷續とか語の速度とか抑揚調子とかの事を述べ、これらが一々實地に人が使ふ色々な場合に變化することを注意したいのである。しかしこの稿の始めから說いて來た子音とか母音とかも實地

の言葉で色々なものが發せられること、亦よく注意しなければならない。前に（五八―五九頁）擧げた「來てくれ」といふ様な例で、「キテ」のキの中にkといふ無聲破裂音を使ふといふが、實地の或場合に急いでぞんざいに云ふ時は舌の後部と軟口蓋とが接觸せずに終つてしまふ等の事があるし、「ワカラナイ」等といふ文句のラの中では本來舌のへりが上齒齦に輕く附く子音を使ふといふが、之も急いでぞんざいに云ふ時は舌が附かないで終り、注意して聽くと「ワカアナイ」等と同じ様に聞えることがある。是等の事實を考へて見るに、極めて嚴格にいへば、舌が口蓋に接觸する時の音と接觸しない時の音とはちがふのだから、之を同じキの音だとかラの音だとか名づけることは出來ない筈のものである。しかし吾々は通例「來て」とか「分らない」とかいふ語の音は皆同じものであると思つて日常の言葉を使つてゐる。これは何故であるかといふと、全く意味を表す上からで、同様に「來て」とか「分らない」とかいふ同じ意味を表すつもりで使ふからである。一體音聲は耳に聞える音響の一種なのだから、音響として少しでもちがふ所があればそれは二つ別々の音響であると謂はなければならない。耳の鋭敏な音樂家などは、素人耳に殆ど氣の附かぬ程の僅かな調子のちがひを聽き分け、少しでも調子が外れると滿足しない位である。ところが言葉の音聲となると、單に耳に響く音響のちがひだけでなく、意味を表すといふ別の箇條をも加へて論ずることが必要になつて來る。同じく「來て」といふ意味を表す故に實地の言葉に出て來る様々な音聲をば「同じ語を造る音聲」として同類の音と考へる事になる。併し又、同じ語の音聲でも詳しく調べれば音響として色々ちがふものも發見し得るのだから、先づ始めに同じ語の音聲として色々なものを集めて置き、次にその中で、音響として大體似寄つたものを取分けて之を集めて見るといふやり方を行ふ。前に述べた様に改まつて氣を附けて物を言ふ場合と、急いでぞんざいに言ふ場合と分けるのはその一例である。

本稿の始めから述べて來たのは氣を附けて叮嚀に言ふ言葉の發音を觀察し、多くの人が多くの場合に出す音聲の性質を記したものである。

元來人の口から出し得る音聲は實に種々雜多なものがあるわけである。出たらめな音や出放題な音までも入れればすゐぶん變つた音も出すことが出來る。或種の藝人は鳥の聲や獸の聲から自動車の音や飛行機の音まで眞似るなどいふ例もある。その樣々な音聲の中或者が言葉の音として用ひられるのである。吾々は言葉に用ひられる音聲を平素聽き慣れてゐるから、これが當り前なものと思ひ、言葉に用ひられない音聲を聽くと、變な音出たらめな奇聲怪聲などと形容する。しかし單に音聲として考へれば皆同じものなのである。それならば何故にすべての音聲の中一部分だけが言葉に用ひられるのか、何故その一部分が用ひられて他の一部分が用ひられないのか。それは別に理窟は無い、唯昔からの傳統で慣習的にさう定まつてゐるだけの話である。吾々が日本語を話すのは生れてから周圍の人々が日本語を使つてゐたから之を聽き覺えたのである。周圍にゐた人は又その幼時に周圍の人々から學んだのである。かくて順次に昔に遡れば一々前の時代の人から承け傳へたのである。さうして幼時に學び覺えた後にも絶えず日常生活で社會の人々と共に言葉を使ひお互に成る可く同じ樣な發音をして意味を傳達し了解しようと努める。かういふわけで言葉及びその發音の社會的慣習が維持される。すべて言葉及びその發音は斯樣な社會的慣習によつて成立つもので、人間の口から出し得る種々樣々な音聲の中、或一部分が言葉に用ひられるのは全くこの社會的慣習によるのである。それだから世界中に英語だの支那語だの日本語だの色々な言葉のあるのは、各國に於てそれぞれ社會的慣習を異にするからである。わが日本國語の音聲の研究は即ち、人間の發音器官として日本人も西洋人も大した區別は無く、勝手次第

な出たらめ音聲を出さうとすれば西洋人も日本人も同じ様な音聲が出せるが、その中、特に日本だけに特有な社會の慣習として日本語といふ言葉が用ひられ、そのためにやはり慣習として一種の音聲が用ひられる、さういふ音聲の研究をするのである。勿論〔p〕とか〔s〕とかいふ一つ一つの音についていへば、日本語の慣習も英語などの慣習も大體同じものがあるかも知れないが、之が連がつて語句を作るのは西洋諸國否全世界の各國語でそれぞれちがふのである。

一體音聲學といふものはかくの如く人間の出し得る音聲の中、言語に用ひられる音聲を研究する學問である。故にその取扱ふ言語の音聲は各社會の慣習によつて定まること、及び言語の音聲である以上は必ず何かの意味を表す音聲であること、言換へれば意味を表す或語句を組立てる音聲であること、これ等の點を常に念頭から去つてはならないのである。而して「國語音聲學」といへば、すべての言語の中、日本語といふ特殊な國語の慣習を研究すること、及び日本語の語句を組立てゝ或意味を表す役目をもつた音聲を研究すること、これが國語音聲學の主要中心をなす仕事である。

昭和八年十二月二十五日印刷
昭和八年十二月三十日發行

國語科學講座（第六回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院